

京都府埋蔵文化財情報

第108号

共同研究報告 弥生後期土器の地域色とその系統-----	高野陽子-----	1
平成20年度発掘調査略報-----		11
5. 温江遺跡	6. 仲ノ段遺跡	
7. 蔵垣内遺跡第12次	8. 長岡京跡右京第953次	
9. 長岡京跡右京第937次	10. 長岡京跡右京第947次	
11. 長岡京跡右京第941次・友岡遺跡	12. 長岡京跡右京第946次	
13. 木津川河床遺跡	14. 魚田遺跡第7次	
15. 鞍岡山古墳・下馬遺跡・片山遺跡		
遺跡でたどる京都の歴史5 長岡京期の京都-----		31
長岡京跡調査だより・104-----		39
普及啓発事業-----		41
センターの動向-----		42

2009年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



弥生後期土器の地域色とその系統

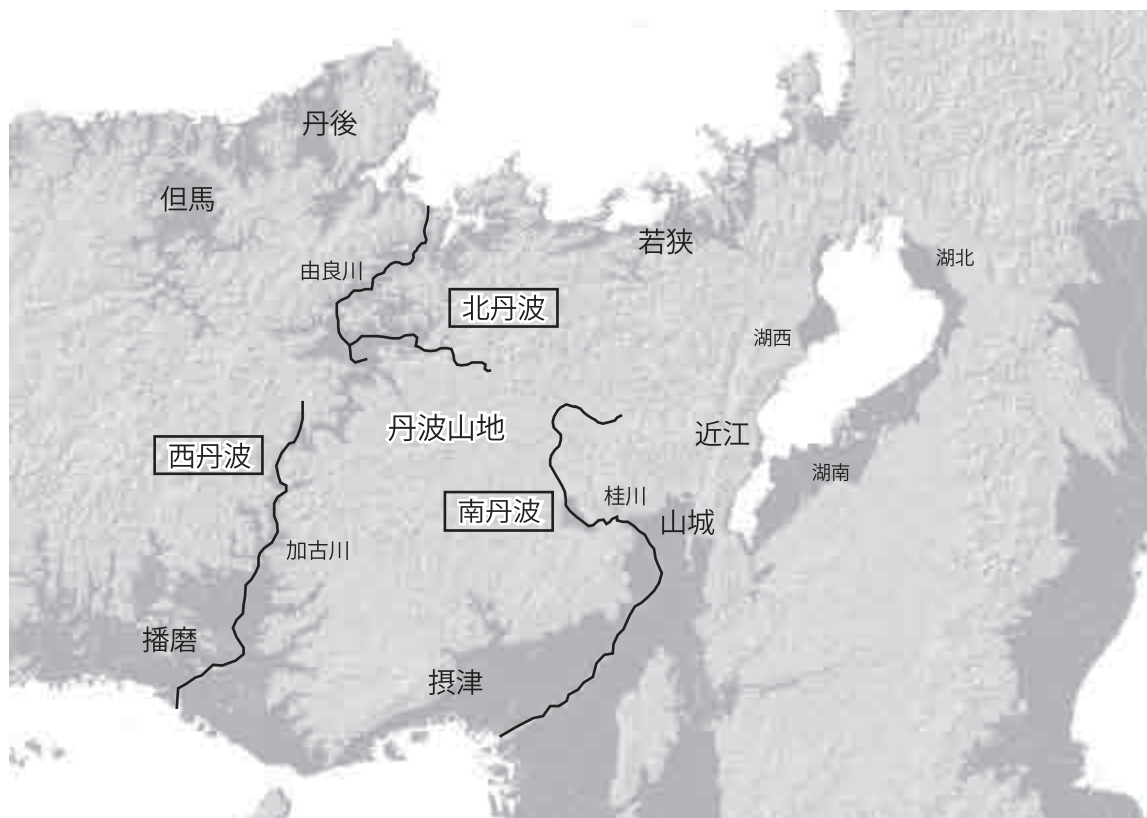
—丹波にみる甕の分析—

高野 陽子

1. はじめに

近畿地方北部の内陸部を中心とする丹波は、丹波山地に水源をもつ水系により、3つの地域にわけられる。由良川中流域から下流域を中心とする北丹波と、篠山盆地から氷上盆地の加古川中流域を中心とする西丹波、そして亀岡盆地を中心とする桂川中流域の南丹波である。丹波では、こうした地域全体を包括する単系的な土器様式があるのではなく、また一つの核となり収斂される中心地域があるわけではない。丹後半島を中心とした後期中葉以降に大きく展開する「擬凹線文系」と、琵琶湖沿岸地域部を中心にした「近江系」、さらに近畿地方南部の「畿内系」という三つの大きな土器様式圏の周縁にあり、それぞれの系統を受容しつつ、派生する土器群を生み出し、複雑な土器様相を示している。

小稿では、北丹波と南丹波を中心に、土器群を系統的に把握し、その消長と相互の関係を検討することによって、丹波の弥生時代後期土器の地域色を明らかにしたい。



第1図 丹波の水系と地域区分

2. 後期の甕の分類

近畿地方北部における弥生時代後期の主要な甕の形態に関して、まず系統的な分類を行う。系統的特徴、すなわち地域的に受け継がれる固有属性は口縁部形態に最も反映されやすいと考え、これをもとに分類し、外面調整・成形技法を一部合わせ、以下のような5つの形式に分ける。

口縁端面が肥厚し、内傾するものをA類とし、次に「有段口縁」とされる口縁部が屈曲して立ち上がり、2次口縁が上方に立ちあがるものをB類に、さらに「受口状口縁」とされるやや内湾気味に立ち上がる受部に短く立ち上がる2次口縁をなすものをC類とする。最後に、「く」字に屈曲する口縁部をなすものを一群としてとらえることができるが、この種の甕については、体部外面のタタキ成形技法の有無によって、系統的な違いがより明確になると考えられるため、タタキ成形による仕上げを行うものをD類とし、ハケ調整で仕上げるものをE類とする。

A～E類については、さらに以下のように細分する。

<A類> (肥厚し上下に拡張する口縁部)

- A 1 2次口縁外面に2～3条の凹線文を施し、体部外面にハケ調整を施すもの
- A 2 2次口縁外面をナデ調整で仕上げ、体部外面にハケ調整を施すもの
- A 3 2次口縁外面に一条の沈線(あるいは浅い屈曲)を施し、体部外面にハケ調整を施すもの
- A 4 2次口縁外面をナデ調整で仕上げ、体部外面をタタキ技法により成形するもの

<B類> (有段口縁)

- B 1 2次口縁外面に擬凹線文を施し、体部外面をハケ調整するもの
- B 2 2次口縁外面に擬凹線文を施し、体部外面をタタキ技法により成形するもの
- B 3 2次口縁外面にナデ調整を施し、体部外面にハケ調整を施すもの
- B 4 2次口縁外面にナデ調整を施し、体部外面をタタキ技法により成形するもの

<C類> (受口状口縁)

- C 1 口縁部・肩部に加飾性をもち、口縁端部が上方に拡張するもの
- C 2 口縁部・肩部に加飾性をもち、口縁端部に面をなし、摘み上げるもの
- C 3 口縁部・肩部ともに無文

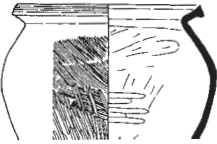
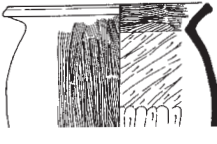
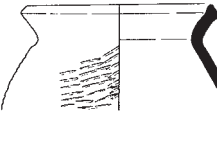
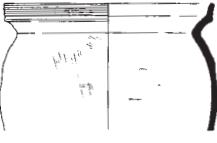
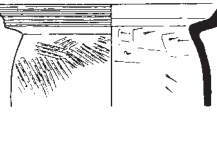
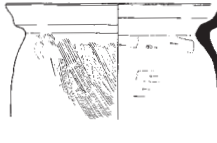
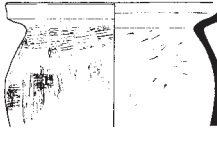
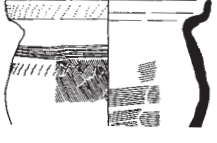
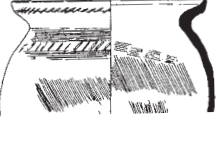
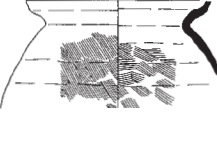
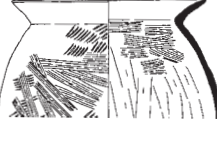
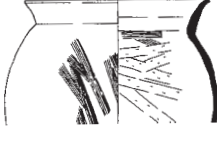
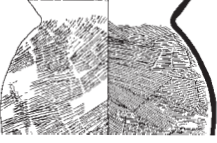
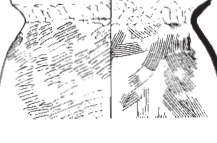
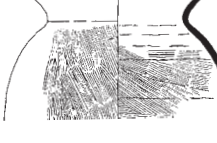
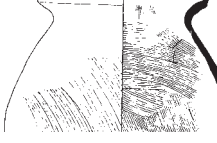
<D類> (「く」字口縁+タタキ成形)

- D 1 口縁端部を丸く単純におさめるもの
- D 2 口縁端部に面をなし、摘み上げるもの

<E類> (「く」字口縁+ハケ調整)

- E 1 口縁端部を丸く単純におさめるもの
- E 2 口縁端部に面をなし、摘み上げるもの

以上のように、口縁部と体部の調整によってA～E類を細分したが、さらに土器の系統的な違いを色濃く反映する属性として、体部の内面調整がある。内面調整は、ケズリによるものと、ハケあるいはナデ調整によるものに大きく2分できるが、ここではケズリ調整によるものをa手法とし、ハケおよびナデ調整によるものをb手法とし、前記した類型に加えることにする。内面調

肥厚する口縁	(内面ケズリ)	A 1	A 2	A 3	A 4
		 (A1a類)	 (A2a類)	 (A3a類)	 (A4a類)
有段口縁	(ケズリ)	B 1	B 2	B 3	B 4
		 (B1a類)	 (B2a類)	 (B3a類)	 (B4a類)
	(ハケ)	 (B1b類)	 (B2b類)	 (B3b類)	 (B4b類)
受口状口縁	(ハケ)	C 1	C 2	C 3	
		 (C1b類)	 (C2b類)	 (C3b類)	
「く」の字口縁	(ケズリ)	D 1		E 1	
		タタキ成形  (D1a類)		ハケ調整  (E1a類)	
	(ハケ)		D 2		E 2
		 (D1b類)	 (D2b類)	 (E1b類)	 (E2b類)

第2図 甕の分類

整は、後期前半に盛行するA類では、内面ケズリ調整が固有の手法として堅持されるが、一方、C類ではハケ調整が基本属性であり、ほとんど例外が確認できない。したがって、A類からE類にすべて、こうした内面調整手法による2類型が生じるわけではないことを付記しておく。

3. 各類型の系統について

A類は、後期前半にみられる土器群であり、瀬戸内系土器およびその影響下で成立した土器の一群である。A1類は、瀬戸内沿岸地域から近畿地方北部の内陸部を含め、日本海側の地域へ広く波及する後期前葉に特徴的な土器である。丹後を核とする近畿地方北部では、こうした土器群を後期前葉に受容し、やがて固有の擬凹線文土器の様式を確立する。A2類は、A1類から派生する形式で、瀬戸内系土器が波及した地域では、北陸を含め日本海沿岸部を中心に広くみられる。組成に占める構成比には地域的な特色がみられ、特に丹後では、その構成比が後期前葉の甕組成のおおよそ3分の2前後を占め、隣接する但馬と比較すると、高い比率で確認できる^(注1)。こうした派生形式の比率が高く、在地化がより進行すると考えられる丹後が、続く後期中葉に近畿地方北部の擬凹線文系土器様式の核となる地域となる。つぎに、タタキ成形技法を特徴とするA4類は、後期前半の資料群が近畿地方全域で少ないながら、その分布は、同じ外面タタキ成形技法によるいわゆる第5様式系とされるD類と異なり、摂津から播磨にかけての大阪湾沿岸部西部から瀬戸内東部地域を分布の中心とする。近畿地方北部では、加古川から由良川に抜けるルート上にA1類などの凹線文系土器とともに流入するとみられるが、加えて摂津の古曽部・芝谷遺跡や山城の中臣遺跡などでは淀川水系からの流入が考えられることから、南丹波ではこうした地域からのルートも想定する必要がある。

B類は、近畿地方北部を中心に分布する有段口縁の甕であり、北近畿系土器というべきものである。瀬戸内地域の凹線文系土器をベースに、その在地化の過程で成立すると考えられるもので、後期中葉以降大きく展開し、古墳時代初頭まで存続する。口縁部外面の調整によって擬凹線文を施すもの(B1・B2類)と、ナデ調整によるもの(B3類・B4類)に分けられるが、瀬戸内系土器A1類を原型としていることから、その核となる形式はB1類である。分布の中心地域となる丹後では、B1類が主体となるが、その周辺域ではB2～B4類の派生形式の比率が高まる。

C類は、近江系土器の一群である。二次口縁を内湾気味に立ち上げ、外方へ引き出す受口状の口縁を特徴とし、口縁部・体部上半に刺突文、刻み目、櫛描文などの文様をもつC1類を基本とする。C類には、派生的形式として、口縁部が受口状をなさず、「く」字口縁に近い屈曲をなし、薄く摘み上げておさめるC2類があるが、こうした形態は近江系のなかでは湖西の高島郡周辺でみられるほか、丹波では南丹波に多く確認される。また、C類には文様による加飾性がみられない一群があり、これらを一括してC3類としておく。C3類については、近江系土器が周辺域で在地化する過程で生成した一群と考えられるがやはり南丹波で多く分布する。

D類は、いわゆる第5様式系とされる、畿内系の「く」字口縁タタキ成形甕である。内面ハケ調整を基調とするD類は、主に後期中葉以降に確認されるようになり、後期後葉～末にかけて盛

行する。口縁端部の形態は大きく分けて2種あり、端部に変化をつけず単純口縁をなすものをD 1 類とし、摘み上げ、端部外面に面をなすものをD 2 類とする。内面調整については、畿内で出土するD類では内面ハケ調整が堅持されるが、丹波ではケズリ手法を属性とするものが散見される。これは内面ケズリ調整を基本とする擬凹線文系土器の影響下に現れる手法と考えられよう。

E類は、「く」字口縁甕のうち、外面をハケ調整するものである。単純口縁をなし内面ハケ調整で仕上げるE 1 類が基本となる。丹波では特に南丹波に多く分布し、後期中葉前半に確認され、古墳時代初頭まで各時期に認められる。古墳時代初頭には、北丹波でも多くみられる。この種の甕の系譜は従来、ほとんど俎上にあげられなかったが、近畿地方では丹波のほか、湖西北部でも組成の一端を占める。外面ハケ調整は近畿地方西部から北部のA・B類や近江系C類にみられる基本的な外面調整であり、一方、内面ハケを基調とする地域は近江と畿内南部であることから、こうした属性の交錯する南丹波はE 1 類の基盤となる地域となりうる。この形式ではタタキ成形痕をわずかに残すものあり、タタキ成形ののち丁寧なハケ仕上げをするものが一部に含まれているとみられることから、なお畿内系D類との系統的な検討が課題となる。

4. 甕の地域色と畿内系甕の搬入状況

北丹波・南丹波の甕の組成を、時期を追ってまとめたものが付表1である。資料が限られるため、資料総数の少ないものについても、組成を知る参考として提示している。時期区分については、丹波では土器の一括資料が乏しく、後期を通じた土器編年がいまだ確立していないため、筆者がかつて丹後で行った時間列の検討等^(注3)をもとに後期を便宜的に5期区分し、地域的な対照を行う。おおそ後期前葉をⅠ期、後期中葉前半をⅡ期、後期中葉後半をⅢ期、後期後葉をⅣ期、後期末をⅤ期とし、さらに古墳時代初頭の庄内併行期前半をⅥ期とする。以下、甕の組成とその消長を中心に、北丹波・南丹波のそれぞれの特色をみてゆきたい。

北丹波

Ⅰ期・Ⅱ期＜後期前葉～中葉前半＞ 北丹波では、これまでのところ、Ⅰ期の資料は確認できない。Ⅰ期は近畿北部全域で瀬戸内系土器の影響が強い時期であるが、参考資料までに、丹後のなかでも西辺の北丹波との境界域に近い宮津市桑原口遺跡6次SK42をあげれば、やはり甕のすべてがA 1 類の瀬戸内系土器から構成されている。Ⅱ期の資料は舞鶴市桑飼上遺跡竪穴式住居跡12の一括資料のほか、舞鶴市水無月山遺跡、福知山市宝蔵山墳墓群の出土資料があげられる。桑飼上住居12資料では、甕の約8割(資料数18)がA 1 類を中心とする瀬戸内系であり、これに擬凹線文土器A 2 類が加わり、組成をなす。A類のなかに、A 4 類の外面タタキ成形の甕1点が含まれており、加古川―由良川ルート上に畿内西部や播磨との交流がうかがわれる。水無月山遺跡土坑1および周辺資料でも、基本的に瀬戸内系A 1 類を主体に、若干のB 1 類が加わるという同様な組成がみられるが、参考資料としてあげる宝蔵山墳墓群では、これに近江系のC 1 類が含まれる。近江系土器は北丹波では青野西遺跡など早い段階から鉢などが流入しているが、丹後ではわずかに後期末～古墳時代初頭に至って京丹後市峰山町古殿遺跡で出土している程度であり、近江

付表1 甕の組成と変遷

北丹波	分類	A 類 (口縁端部肥厚)				B 類 (有段口縁)				C 類 (受口状口縁)				D 類 (くの字口縁・タタキ)				E 類 (くの字口縁・ハケ)				他	計		
		1 類		2 類		3 類		4 類		1 類		2 類		3 類		1 類		2 類		1 類				2 類	
		凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ	凹線	ナデ			凹線	ナデ
属性	口縁部調整・文様	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ		
	外面(ケズリ a・ハケ b)	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ		
Ⅱ期	類型	A1 a	A2 a	A3 a	A4 a	B1 a	B1 b	B2 a	B2 b	B3 a	B3 b	B4 a	B4 b	C1 b	C2 b	C3 b	D1 a	D1 b	D2 b	E1 a	E1 b	E2 b			
	3				1																		4		
Ⅲ期	水無月山土坑 1 周辺				1																		1		
	宝蔵山古墳群 ※	1	1			1								1									4		
Ⅳ期	桑岡上野穴式住 12	14			1	2																	4		
	桑岡上野穴式住 16		1			2				1													8		
Ⅴ期	青野 A 地点 1976 ※	ハケ		2		2				1							1						4		
	桑岡上野穴式住 17	4				4				4													8		
Ⅵ期	岡ノ 4 次 SH0601					4																	4		
	庄村 5 号周溝墓 ※	1				1																	2		
Ⅶ期	桑岡上野穴式住 14	1				8																	16		
	猪谷城 1993 ※	1				4				1													6		
Ⅷ期	浦入 N 地点 S D01	1	1	1		58	1	2		27	2	2		1	1		1			7	3		117		
	桑岡上土器溜まり 2					5				2													8		
Ⅸ期	青野 4 次 XⅡ 地点		1			2				3		3					2						12		
	青野 12 次 S D404					1				2	1	1								2	3		23		
Ⅹ期	青野西 3 号住居					7																	12		
	青野西 6 号住居					2				6										2			10		
Ⅺ期	青野西 10 号住居					1															1		11		
	青野西 15 号住居					2				1							1			2	3		410		
Ⅻ期	小西町田 SK02							5															14		
	庄村 3 号周溝墓									9							2	1					4		
Ⅼ期	青野西 7 号住居	1								2	2												6		
	小西町田 SK08									2									52	7	1		68		
南丹波	分類	A 類		B 類		C 類		D 類		E 類		他		計		他		計		他		計			
	類型	A1 a	A2 a	A3 a	A4 a	B1 a	B1 b	B2 a	B2 b	B3 a	B3 b	B4 a	B4 b	C1 b	C2 b	C3 b	D1 a	D1 b	D2 b	E1 a	E1 b	E2 b			
Ⅰ期	宮川 SH01 ※													1									1		
	今林古墳(墳墓) ※																1						1		
Ⅱ期	今林 3 次 SH11 ※													1						1			1		
	今林 3 次 SH01													1	1			1					6		
Ⅲ期	今林 S D16 ※	1													1	1				1			5		
	狭間 11 号墓 ※																						1		
Ⅳ期	宮川野穴式住居 2 周辺													2	1								3		
	南金峰 ※				1										1								—		
Ⅴ期	今林 SH01														1					2			7		
	野桑 7 次 SH01									1	3				1					1			9		
Ⅵ期	北金峰 SK09										1	1											4		
	北金峰 S D01 ※					5		2	1	3	5	1	2	3	5	6		2	3	1	4	2	449		
Ⅶ期	千代川 SH10099												1						1				4		
	千代川 S D12131											1	1	1				1					12		
Ⅷ期	北金峰 SB03																						1		
	大田 15 次 SH4						2		1										1				3		
Ⅸ期	大田 14 次 S D48													1	1								10		
	大田 14 次 S D98												2					4	1				8		
Ⅹ期	曾我谷大溝																						2		
												1					6	9			4		26		

(※ 個体数僅少あるいは包含層等参考資料)

系の出土は北丹波の特色とみることができる。

Ⅲ期＜後期中葉後半＞ 舞鶴市桑飼上遺跡竪穴式住居跡16のほか、参考資料として竪穴式住居に伴う可能性が示される綾部市青野遺跡A地点の資料があげられる。桑飼上遺跡では、資料点数は少ないながら、擬凹線文土器のB 1 類を主体に、若干の瀬戸内系A類を含む組成をなす。この段階から北近畿系B類のなかに、B 3 類の口縁部外面ナデ調整の甕が出土している。丹後を核とするB 1 類の派生形式であるB 3 類は、北丹波が分布の中心域であり、その地域形式とみることができる。また青野A地点で出土している口縁部外面に一条の沈線を伴うA 4 類は、丹波の出土例が少ないが、敦賀市中遺跡など若狭以東の沿岸部で特徴的にみられる形式である。一方、畿内系タタキ成形甕では、青野A地点のD類甕は近畿地方北部でも最も出土例である。

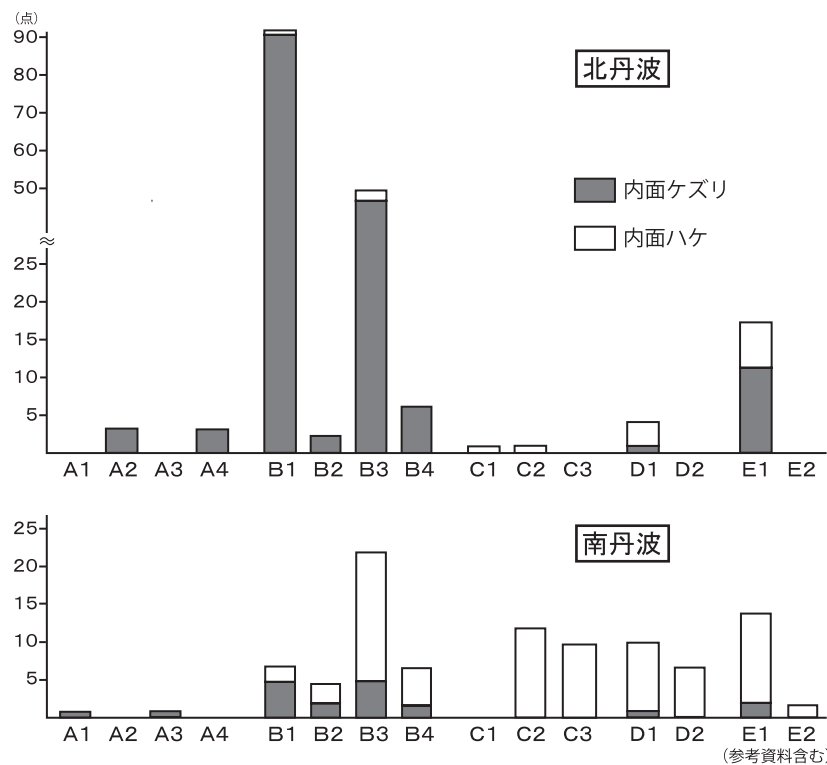
Ⅳ期＜後期後葉＞ 舞鶴市桑飼上遺跡竪穴式住居跡14・17、福知山市岡ノ遺跡S H0601のほか、綾部市庄村5号周溝墓出土資料などを参考資料としてあげる。Ⅳ期は、丹後を核とする擬凹線文土器様式(西谷式)^(注4)が最も拡大する時期であり、北丹波もB類を基調とする展開をみせる。岡ノ遺跡では、資料数が少ないながらもすべて擬凹線文土器B 1 類から成るが、桑飼上住居14では、約4割がナデ調整によるB 3 類で構成され、桑飼上住居17でもB 3 類が約半数(資料数8)を占める。B 3 類が高い比率で確認されるのは、1割に満たない資料が多い丹後と様相を異にしており、地域的な特色である。

Ⅴ期＜後期末＞ 浦入遺跡A地点、青野遺跡4次XⅡ地点、青野遺跡12次S D404をあげることができる。浦入遺跡は、由良川河口域として北丹波に含めたが、日本海沿岸部であるため内陸部とやや様相を異にする。その組成は、擬凹文土器のB 1 類が甕全体の約5割と同時期の北丹波では高く(資料数116)、約4分の1が口縁部ナデ調整のB 3 類である。外来系では近江系がわずかながら確認され、また、D 1 類のほか、その影響下に北近畿系B類のなかに、タタキ成形を施す折衷的な土器が確認される点も注目される。一方、内陸部の青野4次XⅡ地点では、B類は甕全体のなかで6割を超える(資料数13)が、擬凹線文土器のB 1 類は2割以下(資料数13)であり、丹後や沿岸部と対照的である。青野12次S D404でも、B類は全体の4割(資料数12)であるが、口縁部ナデ調整のB 3 類、タタキ成形のB 4 類が比率を増す。また、「く」字口縁ハケ調整甕のD 2 類が組成の一部を形成していることは、南丹波と様相を一にする。

Ⅵ期＜古墳初頭＞ Ⅵ期は、古相示す資料として綾部市青野西遺跡3・6・10・15号住居、同小西町田遺跡S K02、新相を示すものとして青野西遺跡7号住居や庄村3号周溝墓、小西町田遺跡S K08などがあげられる。古相では、基本組成は擬凹線文土器B 1 類とナデ調整のB 3 類のほか、「く」字口縁ハケ甕のE類が急激に増加し、組成の中心となる。新相では、畿内系D類の比率が高まり、小西町田遺跡S K08では畿内系D 1 b類が約7割(資料数68)を超える。

南丹波

I期・Ⅱ期＜後期前葉～中葉前半＞ I期の資料としては、亀岡市宮川遺跡S H01をあげるにすぎない。ここで出土している1点の甕は近江系C 1 類である。Ⅱ期の資料は、園部町今林墳墓、今林遺跡3次S H11をあげるが、わずかながら出土している甕は、「く」字口縁の外ハケ調整



第3図 弥生時代後期後半期(Ⅲ～Ⅴ期)における甕の組成

(注5)
遺跡は、これまで一部が報告されているにすぎないが、Ⅱ～Ⅲ期にやや時期幅をもつ資料である。南金岐遺跡では、瀬戸内系A4a類が大・中・小と各法量においてみられ、組成を構成する主要な甕のひとつとみることができる。受口状口縁甕についてはバラエティがあるが、主たる形式は、明瞭な受口状をなさず、端部に面をなし摘み上げるC2類である。近江系には野洲川流域を中核に湖南に分布する「南部系」と、湖西・湖北を中心に分布する「北部系」があるとされるが、C2類が「北部系」の系譜にあることは、口縁部形態や文様構成からも明らかである。ただし、C2類の口縁部は、「く」字口縁に近い屈曲をなし、面をなし摘み上げるもので、近江では湖西の針江川流域などに多くみられ、南丹波でも特徴的な手法といえる。また、近江系のなかで無文として一括したC3類は、南丹波では複数の遺跡で確認され、在地的に受容し、地域的な形式を生み出していることがわかる。

Ⅳ期＜後期後葉＞ 南丹市園部町今林遺跡SH01、同八木町野条遺跡7次SH01、亀岡市北金岐遺跡SK09のほか、同SD01を参考資料としてあげる。主たる形式は、北近畿系のB3類になるが、北丹波と大きく異なるのは内面調整であり、北丹波がケズリ調整を基本とするB3aであるのに対し、南丹波では内面ハケ調整を基本とするB3bが主体となる。この時期は土器組成全体をみると、近江系鉢、細頸壺などいくつかの形式において近江系が補完的にみとめられる時期であり、近江地域からの西側への影響が最も強まる時期といえる。

Ⅴ期＜後期末＞ 亀岡市千代川遺跡SH10099、同SD12131、亀岡市北金岐遺跡SB03、同太田遺跡15次SH4、同太田遺跡14次SD48をあげる。組成の中心をなすのは、Ⅳ期と同様、北近畿系B類であるが、Ⅳ期よりもB3類の比率が高まり、さらに内面ハケ調整のB3b類が主体と

甕E類で、有段口縁のB類を基調とする北丹波と対照をなす。

Ⅲ期＜後期中葉後半＞ 南丹市園部町今林遺跡3次SH01、参考資料として園部町今林遺跡SD16、同狭間11号墓、亀岡市南金岐遺跡、同宮川遺跡竪穴式住居2周辺をあげる。いずれも資料点数が少ないものの、組成は北近畿系のB3類と近江系C類に加え、「く」字口縁のハケ調整甕E類からなる。参考とした南金岐

なっている。参考資料とした北金岐遺跡(資料数49)では、北近畿系B類が約39%で、近江系C類が約29%、E類が約15%、畿内系D類が約10%の比率でみとめられる。外面タタキ成形技法は、B2・B4類を合わせ、B類全体の約3割の個体にみられ、畿内系甕D類を合わせると、甕全体の2割程度にタタキ成形の手法が認められる。

Ⅵ期<古墳初頭> 古相として亀岡市太田遺跡14次SD98、新相として南丹市園部町曾我谷遺跡大溝出土資料をあげる。古相では、北近畿系B類と畿内系D類がほぼ同程度の割合でみとめられるが、新相の曾我谷遺跡出土資料(資料数26)では、畿内系D類が約58%と優勢となり、北近畿系B3・4類が約15%、E類が約15%で構成され、畿内系が優勢となる。

5. 甕にみる丹波の地域色とその消失

今回の共同研究の主題は、弥生時代における土器および石器を対象にした丹波の地域色の検討であり、小稿では弥生時代後期を中心に各系統が交錯する甕について検討を加えた。

丹波では、北丹波・南丹波ともに、後期の主となる甕の系統は、Ⅲ期～Ⅴ期(後期中葉後半～末)に盛行する北近畿系の有段口縁をなすB類である。B類は擬凹文土器(B1類)と、口縁部ナデ調整による甕(B3類)に分けられるが、特に後者は丹波の在地的な甕とみることができる。北丹波ではⅢ期～Ⅳ期の甕の基本組成は、B1類を中心とし、B3類がこれを補完する。一方、南丹波では、B3類が組成の中心となり、近江系土器が主にこれを補完するものになる。B3類は、北丹波で甕全体の約25%、南丹波で全体の約50%を占める。

近江系C類は、南丹波ではⅢ期(後期中葉後半)にその受容形態とみられる、受口状口縁の未発達なC2類が出現する。以降、後期を通じこの甕はC類の主たる形式となり、南丹波に特徴的な甕となる。C類は北丹波でも確認できるが、南丹波に比較すると限定的なものである。

「く」字口縁甕のなかでも外面ハケ調整で仕上げるE類は、北丹波と南丹波のいずれにおいても後期を通じて組成の一部を構成する甕だが、主体的な位置を占めることはない。タタキ技法の痕跡を残すものが一部にみられることから、D類との系統的な分析がさらに必要になるが、基本的には丹波のなかでも南丹波を中心に展開する在^(注7)地系甕とみなすことができる。

いわゆる第5様式系の畿内系甕D類は、北丹波・南丹波とも、Ⅳ期～Ⅴ期(後期後葉から末)に組成の一角を占めるようになる。南丹波では、Ⅴ期にはなお近江系C類が優勢であるが、Ⅵ期新相(庄内併行期前半)に至り、D類がB類を稜駕し、主要形式となる。北丹波では、Ⅴ期からⅥ期にかけての土器様相の変化は急激で、B1類を組成の中心としたⅤ期の様相はⅥ期に一変し、畿内系D類が圧倒的な量で流入し、在地での生産に至っている。こうした畿内系タタキ甕の流入は山城・南丹波を介した畿内南部から影響とみるより、むしろ畿内西部の摂津・播磨東部から加古川・由良川ルートを介して流入したものとみるべきである。なぜならⅣ期～Ⅴ期の古相には、播磨・摂津ではD類が盛行するが、南丹波では、太田遺跡14次SD98にみるようにB類とD類は折半し、D類はなお甕の主形式となっていないからである。西丹波から北丹波に至る加古川流域には、月影式甕などの北陸系土器が散見されることや、摂津田能遺跡などに類例をみる畿内で最も古い形

式の二重口縁壺が早くもⅤ期の青野遺跡などに確認されることなどから、北丹波にあっては、このルートがⅤ期からⅥ期にかけて、摂津・播磨など近畿南西部の情報を伝える基幹路としての重要性を高めたことは疑うべくもない。

Ⅳ期～Ⅴ期において、北丹波はなお丹後西谷式の様式圏にあり、赤坂今井墳丘墓に代表される丹後の地域勢力は北丹波に影響を与えたと考えられる。西谷式は、後期後葉～末に最も拡張し、西丹波の篠山盆地周辺まで南下して浸透していることから、この時期の加古川-由良川ルートの主要な機能は、北近畿と瀬戸内東部・畿内西部を繋ぐものであっただろう。しかしながらⅥ期(古墳初頭)には、前述したタタキ甕D類などの畿内系土器の大量流入という土器様相の急激な変化がもたらされ、西谷式は終息に向かい、かわって加古川・由良川流域には畿内系土器に加え、北陸系土器、さらには近江・東海系祭式土器が多量に流入するようになる。鉄器の大量副葬が明らかとなった福井県乃木山墳丘墓に代表される北陸南部や近江北部、播磨南部などの地域勢力の拡張のもとに、このルートは瀬戸内沿岸部と北陸、さらには東海以東を結ぶ列島規模の東西交流における主要な基幹路となる。北丹波はまさにその結節点にあり、近畿北部においていち早く弥生後期土器の地域色を失うことになるのである。

本稿は、平成18・19年度に採択された共同研究「弥生時代における地域色の発現－丹波の地域色とは何か－」(共同研究員中川和哉主任調査員)の成果である。

注1 高野陽子「タニハの土器をめぐる交流」(『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』香芝市二上山博物館) 2007

注2 北丹波の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器相を論じたものとしてa～c文献を、また南丹波の弥生後期土器の編年の見通しを論じたものとしてd文献がある。

a. 小山雅人「北丹波地域 第Ⅴ様式」(『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 b. 近澤豊明・三好博喜「由良川中下流域の庄内式併行期の土器について」(『庄内式土器研究ⅩⅠ』庄内式土器研究会) 1996 c. 近澤豊明「北丹波における庄内併行期のタタキ甕について－丹波系土器の変容と崩壊－」(『庄内式土器研究ⅩⅩⅡ』庄内式土器研究会) 2000 d. 福島孝行「5. 考察(1) 弥生後期の南丹波地域の土器変遷」(『京都新光悦村関係遺跡発掘調査概要』(『京都府遺跡調査概報』第97冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注3 a. 高野陽子「北近畿における弥生時代後期前半期の土器とその時間列」(『京都府埋蔵文化財論集 第4集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001 b. 高野陽子「擬凹線文土器の様式と編年」(『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター) 2006

注4 高野陽子「近畿地方北部の土器」(『考古資料大観2 弥生・古墳時代の土器Ⅱ』小学館) 2002

注5 今回の資料調査により、甕A3a類が法量を違え、量的に出土していることを確認した。

注6 近藤広「弥生後期における受口状口縁土器の様相－近江の地域区分と他地域への影響－」(『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』) 2001

注7 近畿北部でこの種の甕は、湖西の針江川流域でも組成の一部にみられる。近江系C2類の共通性と合わせ、この地域と丹波の土器交流はさらに検討する必要がある。

5. 温江遺跡

所在地 与謝郡与謝野町加悦地内
調査期間 平成20年11月25日～平成21年2月13日
調査面積 334㎡

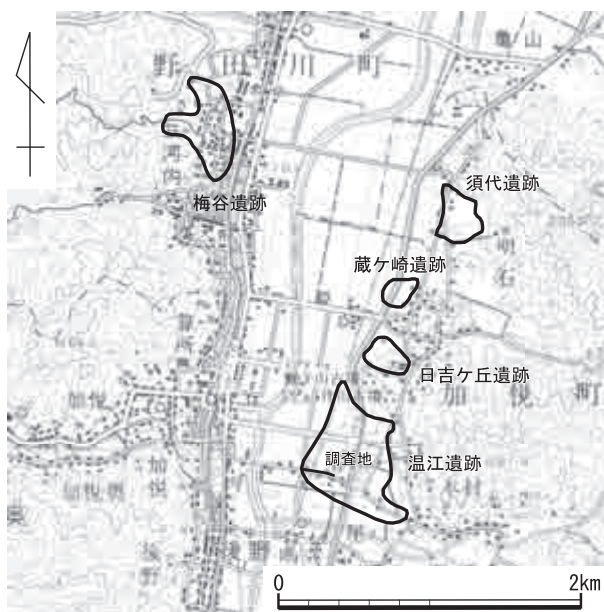
はじめに 温江遺跡は、加悦谷のほぼ中央部、東から西に張り出す丘陵上に位置している。丘陵の北辺には蛭子山古墳・作山古墳があり、東の山裾には温江大塚古墳や温江丸山古墳、南には、谷を隔てた丘陵上に、白米山古墳や鳴谷古墳群が造られている。この地域は与謝野町はもとより、丹後地域でも大規模な古墳が密集するところとして知られている。

過去の調査では、176号バイパスの建設時の発掘調査で、弥生時代後期、古墳時代および平安時代の集落が確認されている。今回の温江遺跡の発掘調査は、京都府の依頼を受けて、府道温江加悦線の改良事業に伴い実施したものである。

調査概要 調査は、道路を拡幅する幅約5m、総長約250mを対象として、幅約3mのトレンチを8本設けて、計約110mの長さにわたって実施した。東から西に向けて、1～8トレンチとした。

1・2トレンチでは、流路内で堆積した土砂を確認した。3トレンチでは、トレンチのほぼ中央で南北方向の大溝を検出した。溝の規模は、幅約1.85～2.0m、深さ1.1～1.2mで、溝の断面形状はV字形となる。内部からは弥生時代前期の土器が出土した。この大溝より東側では、現代の土坑・溝、弥生時代後期～古墳時代前期の溝を検出したが、西側では多数のピット・土坑を検出した。4～6トレンチでは、多くのピット・土坑を検出した。これらは出土遺物から、弥生時代前期と後期～古墳時代前期の2時期のものが混在している。5・6トレンチでは弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡1棟、時期不明の竪穴式住居跡1棟を検出した。

7トレンチでは、南北方向の大溝を検出した。溝の西辺は調査地外のため、幅は不明であるが、幅1.6m以上、深さ1.1mを測る。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 大江山・宮津)

この大溝は、3 トレンチの大溝と対になり、集落をめぐる環濠となるものと推定される。後述の人面付き土器は、多数の弥生時代前期の土器片に混じって、この大溝から出土した。この溝と重複して、2 m 以上×1.8m の土坑を検出した。

8 トレンチでは顕著な遺構・遺物を確認できなかったが、丘陵上の土砂が堆積しているのを確認した。

人面付き土器(巻頭カラー図版) 今回出土した人面付き土器は、首より下が欠落しており、残存高8.5cm、顔の長さ9.15cm、顔幅5.6cm、奥行き7.1cmを測る。縄文時代の土偶とは異なり、人の頭部を写實的・立体的に表現している。頭頂部から後頭部にかけて縦方向に鬘もしくは鶏冠のような表現があり、部分的に赤色顔料が観察できる。後頭部には、横方向の櫛のような表現と深い小さな孔がある。目と口は線刻で表現され、隆起した鼻には小さな2つの孔が、そして両耳にも小さな孔が貫通している。この孔は耳飾りもしくは外耳道を表現したものと思われる。他地域の人面付き土器や土偶には、刺青を表現したものもあるが、今回の土器には刺青の表現は認められない。人面土器の内部は中空で、粘土紐を積み上げて作られていることが観察できる。

京都府内では、縄文時代晩期から弥生時代にかけての人を表現した土製品として、長岡京市雲宮遺跡の土偶(縄文時代晩期)、向日市森本遺跡の人面付き壺形土器(弥生時代中期)がある。

まとめ 今回の調査地は、温江遺跡の西南部にあたり、弥生時代前期の集落跡を確認し、野田川流域で初めて成立した弥生集落の1つと考えられる。この集落の東辺と西辺には大溝があることから、東西幅100mほどの環濠集落と考えられる。調査地は丘陵の南辺部に位置し、集落の中心は今回の調査地の北側に位置するものと推測される。西側の大溝からは数多くの土器片が出土し、併せて人面付き土器が出土した。丹後地域の弥生文化や習俗を理解する上で、貴重な資料となるであろう。また、弥生時代前期の集落の後に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけても集落が営まれていること判明した。



さらに、現地地形を見ると、8 トレンチの東側に段差が認められ、ここが丘陵の端にあたるものと考えられていたが、今回の調査で丘陵がさらに西に延びていることが分かり、温江遺跡の範囲はさらに西に広がるものと推測される。

(岩松 保)

第2図 人面付き土器が出土した7 トレンチ大溝

6. 仲ノ段遺跡

所在地 福知山市大江町字北有路

調査期間 平成20年11月12日～12月19日

調査面積 200㎡

はじめに この調査は、国道175号線の交通安全施設の整備事業に先立ち、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施したものである。

仲ノ段遺跡は、京都府遺跡地図に土師器、土錘などを出土する中世の集落遺跡として登載されている。遺跡内の調査地は、西側の丘陵から張り出した低い台地の縁辺部で、標高10m前後を測る(第1図)。今回は試掘調査として、南北に細長い調査範囲に南からAトレンチ(45㎡)、Bトレンチ(140㎡)、Cトレンチ(15㎡)の合計3か所のトレンチを設定し、重機および人力による掘削・精査を行った。

調査概要 調査の結果、Aトレンチ南半部より、鎌倉時代の遺構・遺物、奈良・平安時代および縄文時代の遺物包含層を検出した。Aトレンチ北半部さらにBおよびCトレンチについては、明治40年の洪水被害で移転した宅地跡の溝および柱穴・土坑を検出したのみで、顕著な遺構・遺物は得られなかった。後世の削平により土層の堆積も浅く、耕作土直下で暗黄褐色砂礫の固い地山を確認した。以下、Aトレンチ南半部の主要な遺構・遺物を報告する。

Aトレンチ南半部は、微高地から東側の由良川河川敷に向かう緩斜面であるとともに、南側に小さな谷状地形がみられ、そこに中世の遺構を含む粘質土の堆積がみられた。

検出遺構は、鎌倉時代の溝または落ち込み状遺構 S X 1・柱穴・土坑がある。

S X 1 は調査区の南東端にかかり、長さ8.5 m・幅1.5 m・深さ0.4 m分を検出した(第2図)。暗赤褐色粘質土の埋土全体から、まばらに遺物が出土した。遺物には土師器皿・瓦器碗・輸入陶磁器・須恵器甕・銭貨・土錘などがある。土師器皿の一部を除き、すべて土器類は破片である。日用品の土師器皿および瓦器碗からみて鎌倉時代前半に掘られた遺構であろう。また、銭貨は3点あり、天禧通寶(1017)・熙寧元寶(1068)・紹聖通寶(1094)である(括弧内は初鑄年)。

柱穴は直径20～30cmを測るものが数基あり、土師器のほか石臼の断片が出土した。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 大江山)

これら鎌倉時代の遺構面より下層に奈良・平安時代の包含層が堆積し、さらにその下に縄文土器を出土する面が確認できた。縄文土器は縄文時代後期の深鉢である。

まとめ 今回、調査対象地の南側(Aトレンチ南半部)から、鎌倉時代の遺構・遺物、奈良・平安時代の包含層、さらに下層で縄文時代後期の土器の出土状況を確認することができた。従来より中世の集落遺跡として知られていることを補強する資料が得られた。溝または落ち込み状遺構 S X 1 は集落の縁辺部に設けられたとみられ、全容とその性格を追及する必要がある。

奈良・平安時代、縄文時代については、本遺跡より北の由良川下流域における自然堤防上に、地頭遺跡・桑飼上遺跡・桑飼下遺跡・志高遺跡など著名な遺跡が多く知られ、由良川における水運や漁撈、さらに森林資源の恵みを享受しつつ地方色豊かな文化を形成してきた。そして同様の地形・景観の中に本遺跡も立地しており、それら遺跡群との関連に注目したい。

(黒坪一樹)



第2図 Aトレンチ南半部遺構検出状況

7. 蔵垣内遺跡

所在地 亀岡市千歳町国分四反田・広垣内・正田・内垣内

調査期間 平成20年11月4日～平成21年2月24日

調査面積 1,830㎡

はじめに 今回の調査は、府道亀岡園部線の建設工事に先立って京都府の依頼を受けて実施したもので、平成19年度に引き続き2年目に当たる。昨年度は、A・D・EおよびG地区の調査を実施し、縄文時代早期の押型文土器(高山寺式)が出土するとともに、弥生時代・飛鳥時代・奈良時代と中世の各時期の遺構・遺物を検出した。

なお、蔵垣内遺跡では、平成13年度から18年度にかけて国営農地再編整備事業に伴って当調査研究センターのほか、京都府教育委員会や亀岡市教育委員会が発掘調査を実施した。その際に多数の遺構・遺物を検出した。また、蔵垣内遺跡の北半には、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて築造された国分古墳群が分布しており、一部調査を実施した。

調査の概要 今年度はD・E地区の残りと、HおよびI地区において調査を実施した。D地区では昨年度と同様に飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構・遺物を検出した。大型の柱穴等を確認したが、建物として復原することはできなかった。

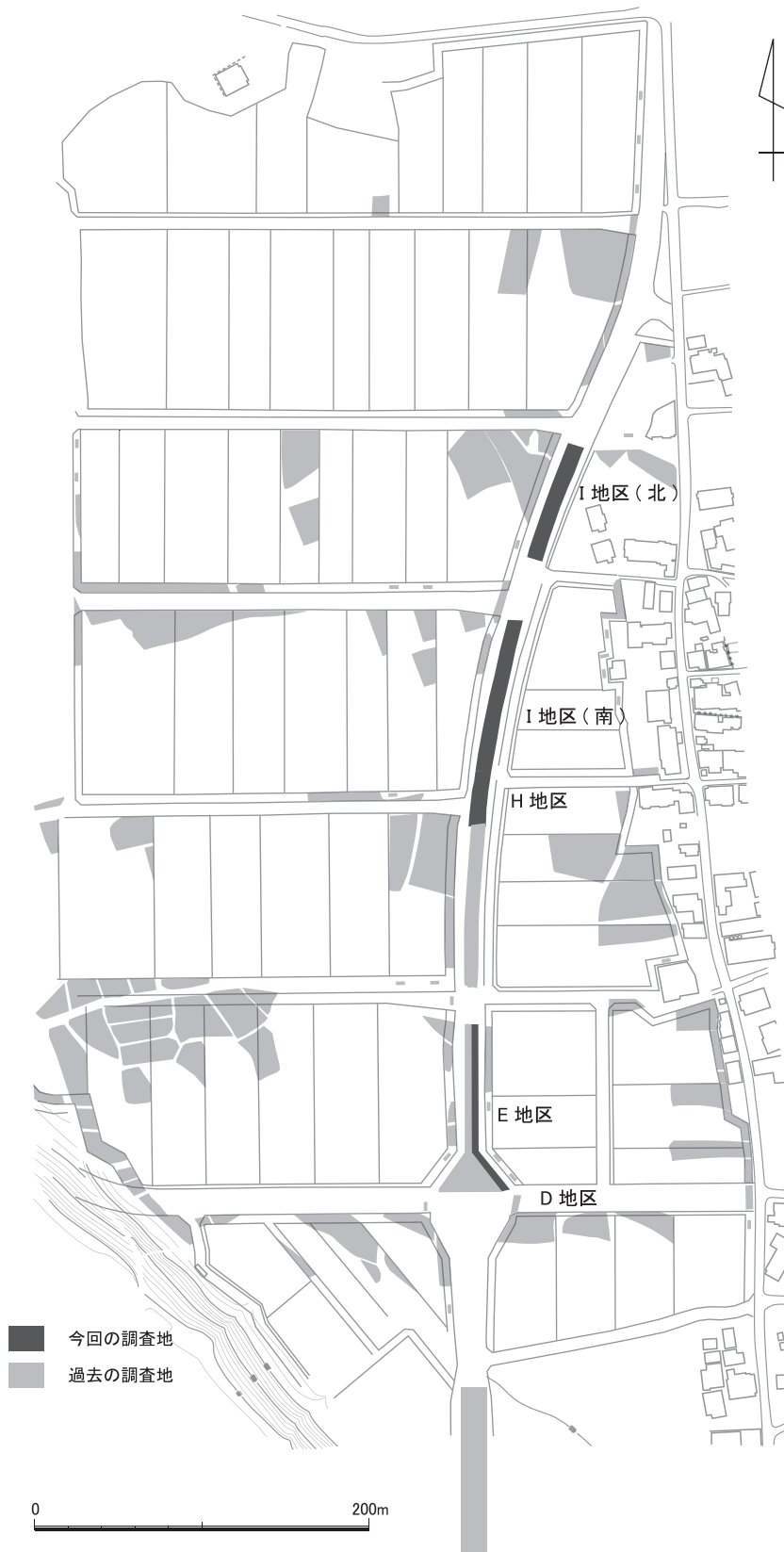
E・H地区では、中世の遺構・遺物を検出したが、建物などとして復原するには至らなかった。また、D地区からE地区にかけて平安時代の遺構も若干確認し、須恵器や緑釉陶器、鉄磬などが出土した。

I地区では、南北の2か所にトレンチを設定した。北調査区では、中世の柱穴や土坑、溝などを検出した。柱穴は、多数検出したが、建物として復原することはできなかった。調査区の北端では、土師器皿がまとまって出土しており、何らかの祭祀・儀礼に使用されたと考えられる。一方、南調査区では、北調査区と同じく中世の柱穴や土坑・石組み遺構などを検出した。石組み遺構については、溝や石垣などの基礎部分の可能性があるものの、残存状況等が良好ではないため、詳細は不明である。

まとめ 今回の発掘調査では、奈良時



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)



第2図 調査区配置図

代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。特に、I 地区では中世の遺構・遺物が多数検出されたが、周辺でも同時期の遺構・遺物が多数確認されている。調査地の西約 200m に位置する丹波国分寺は、一時衰退していたが、中世になって再び発展してきたことをこれらの遺構・遺物の上から明らかにすることができた。また、石組み遺構や大規模な造成の存在からかなり規模の大きな集落が形成されていた可能性も高くなった。

(筒井崇史)

8.長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)

所在地 長岡京市西の京地内

調査期間 平成20年9月24日～12月3日

調査面積 720㎡

はじめに 今回の発掘調査は平成20年度外環状線(第5工区)地方道路交付金(街路)業務委託に係る調査である。長岡京跡の新条坊では、右京二条二坊十六町にあたり、西二坊大路および大路東側溝の推定地にあたる。また、上里遺跡の東隣接地に位置する。

当該地より南西100mで実施された長岡第十小学校建設に伴う調査において、長岡京跡でも最大規模の掘立柱建物跡が見つかった。また、旧流路が埋没した窪地を杭で護岸した奈良時代の溝から多量の土器が出土した。一方、伏見向日町線道路新築工事に伴う調査では一条大路南側溝や西三坊坊間東小路東西両側溝、右京二条三坊八町域の掘立柱建物跡などともに、下層の上里遺跡では縄文時代晩期の竪穴式住居跡や土器棺墓、弥生時代前期の土器棺墓などが見つかっている。

調査概要 今回の調査は、右京第584次調査の東隣接地に1か所とその北側の一段下がった水田部の2か所に調査区を設けた。北端に設定した1区では氾濫原中で自然流路跡を確認した。流路の堆積土である礫混じりの暗灰色粘質土や黄色砂中から縄文時代晩期から平安時代、中世、近世の磨滅した土器などの遺物が数十点出土した。この層を掘り下げると、マンガン分が沈着した橙茶色の砂礫層となる。重機により深さ約2mの断ち割りを行った結果、人頭大の礫層が厚く堆積し、遺構がないことを確認した。2区は、幅5m、南北19mのトレンチである。灰色粘質砂層は4層に分層でき、出土遺物から中世、近世の堆積土と判断した。遺構は検出できなかった。3区は、幅1.3m、南北38mのトレンチである。遺構検出面は北側では灰白色粘質土、南では黄褐色粘質土となる。南側で溝2条を検出した。SD95302は、幅1.5mを測る南西から北東に流れた溝である。また、SD95303は、幅2.4m、深さ0.3mを測る。須恵器杯身片が出土した。断ち割りによって、この下層で自然流路跡を確認した。堆積土の砂礫中では土師質の土器片が出土した。

まとめ 今回の発掘調査では明確な遺構は確認できなかった。隣接する右京第584次および第691次調査においても顕著な遺構・遺物は見られず、調査地近辺は土地利用が希薄な場所であった可能性がある。しかし、今回出土した格子叩きの平瓦は、小畑川の支流を含む調査地上流域に白鳳期寺院等の存在を示唆するものである。(柴 暁彦)



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

9. 長岡京跡右京第937次

調査地 長岡京市下海印寺上内田

調査期間 平成20年6月17日～10月8日

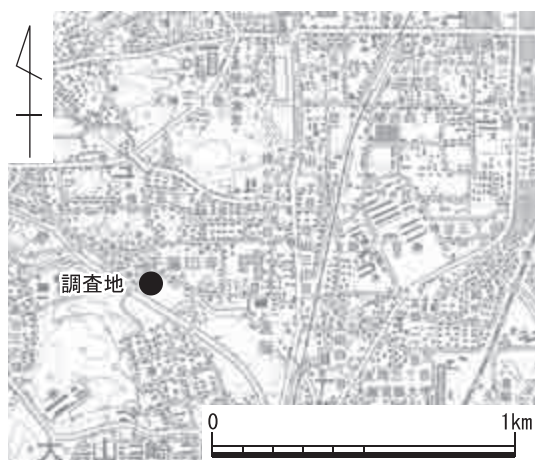
調査面積 1,200㎡

はじめに 今回の調査は、平成19年度に行われた右京第901次調査、右京第902・928次調査および右京第926次調査（試掘調査）の成果を受け、実施したものである。19年度調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡や土坑、古墳時代初頭～古墳時代後期の流路などが検出されている。

調査概要 調査区は、第926次調査地の西側（上内田－1地区）、第928次調査地の北側（上内田－2地区）の2か所で設定した。

1地区では、古墳時代中期～後期の土坑群・流路のほか、中世の素掘り溝群を検出した。素掘り溝群は、10数条を検出したもので、耕作に伴う溝と推定される。溝内から、瓦器片が出土している。古墳時代中期～後期の土坑群や落ち込みは、南部を中心に検出した。土坑の平面形は不整形のものが多く、床面も整地されていない。また土坑群とほぼ同時期と考えられる落ち込みS X 1009は、長さ17.4m、幅6m、深さ30～40cmの溝状の長い落ち込みで、暗灰色シルトが堆積し、湿地状の堆積環境にあったとみられる。遺構内から、完形品を含む須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器直口壺・高杯などが出土している。遺構の性格については、不整形な形状やベース面が青灰色粘土であり、粘土採掘坑の可能性が高いが、土師器壺などが正置した状況で出土したことから、水辺の祭祀に関わる遺構である可能性も否定できない。

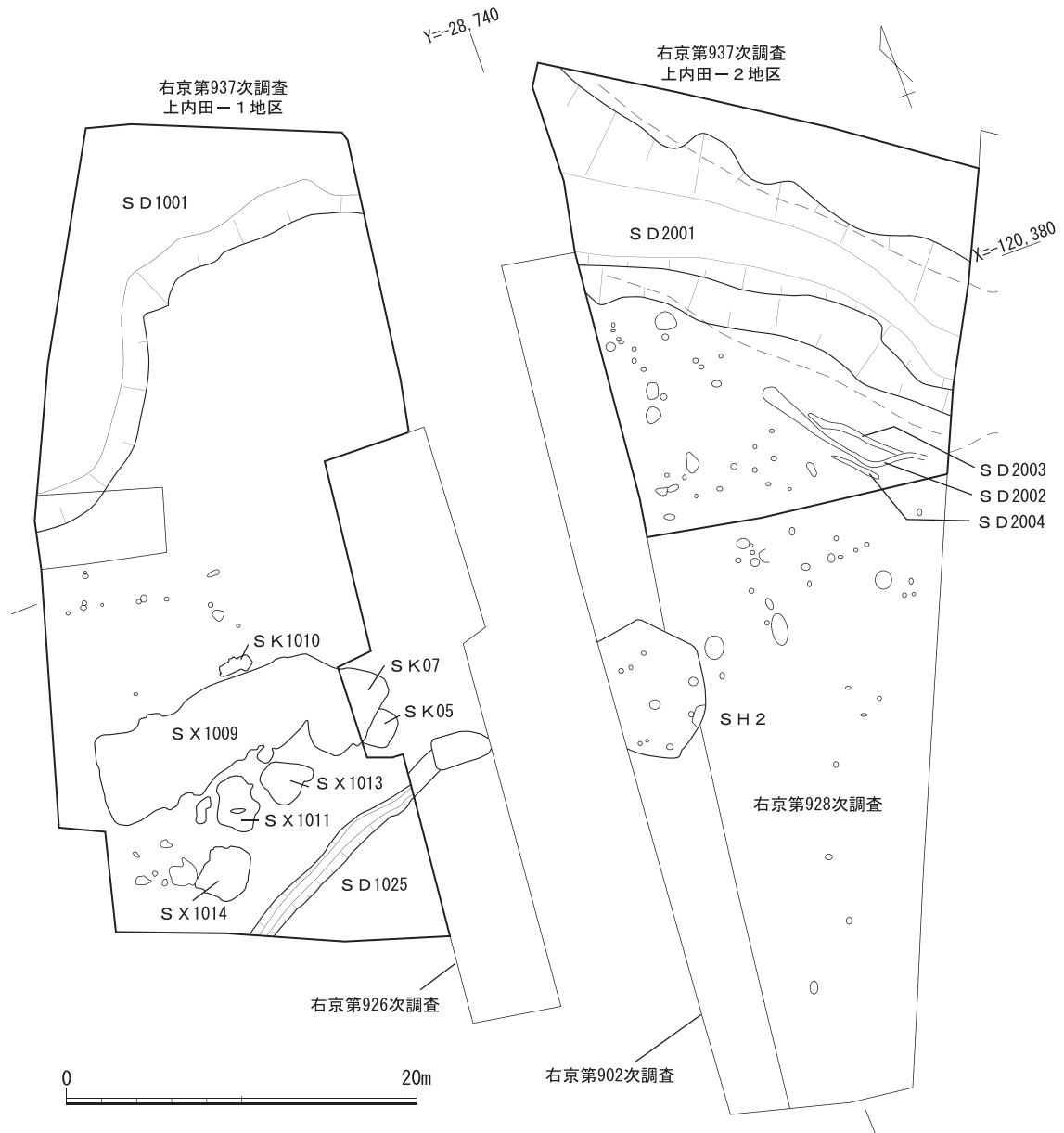
2地区では、第901次調査で確認されている古墳時代初頭～後期の溝の一部や溝3条、柱穴などを検出した。S D 2002～2004の溝3条や柱穴は、出土遺物がなく時期不明である。



第1図 調査地位置図
（国土地理院 1/25,000 京都西南部）

1地区北側で屈曲し、2地区北側を東流する流路S D 1001・2001の規模は、幅4～5mを測る。上層は古墳時代中期～後期の流路（第2図実線）で、下層は古墳時代初頭の流路（第2図破線）である。S D 1001では下層の流路は検出していない。流路内からは周辺から流れ込んだとみられる弥生時代中期の石包丁なども出土している。また、流路の断ち割りで、2地区東側の流路下の洪水堆積層からわずかな縄文土器片が出土している。

まとめ 今回の調査では、右京第901次調査で検出した古墳時代初頭～後期の流路の続きと、古墳



第2図 遺構配置図

時代中期～後期の土坑・落ち込みなどを検出した。住居など新たな広がりの確認できなかった。調査地の西部で、古墳時代後期の土坑から多くの土器が出土したことから、北西部の台地上を中心に集落が展開すると思われた。

(岡崎研一)

10.長岡京跡右京第947次

所在地 長岡京市下海印寺下内田・樽井

調査期間 平成20年7月8日～10月10日

調査面積 伊賀寺地区630㎡ 樽井地区300㎡

はじめに この調査は京都第二外環状道路建設工事に伴う試掘調査である。調査地は標高26.5mの河岸段丘上に位置する伊賀寺地区と、段丘下の旧小泉川水系によって開削された標高24.5mを測る氾濫原に位置する樽井地区に分かれる。伊賀寺地区は伊賀寺遺跡の南端にあたる。

伊賀寺遺跡では、府道の建設及び当事業に係る発掘調査によって縄文時代中期から後期にかけての集落及び墓域の遺構が検出されており、今回の調査地の北半からは弥生時代末から古墳時代にかけての竪穴式住居跡が検出されている。

道路予定地は、長岡京跡・下海印寺遺跡・伊賀寺遺跡をはじめ多くの遺跡を通ることから平成15年度から、路線内の調査を実施しているところである。今回の報告は、長岡京跡右京第947次調査の略報である。

調査概要 今回の調査地は、長岡京条坊復原図によれば、右京八条三坊十五・十六町にあたる。

伊賀寺地区は、R943次調査地に隣接する。調査成果として、R943で検出された弥生時代終末期(庄内期)の竪穴式住居跡(SH02)の東隅、同時期の竪穴式住居跡(SH05)、時期不明の土坑(SK03)、SH05上面を通る中世の溝(SD01)、中世以降の掘立柱建物跡や柱穴などを検出した。SH05は検出面からの深さ約30cm、一辺約8.0mの方形住居跡である。中軸線が約45度西に振れている。南東辺の中央部に2.0×1.5mの袋状土坑があり、南東以外の辺に1.0～1.2mのベット状遺



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

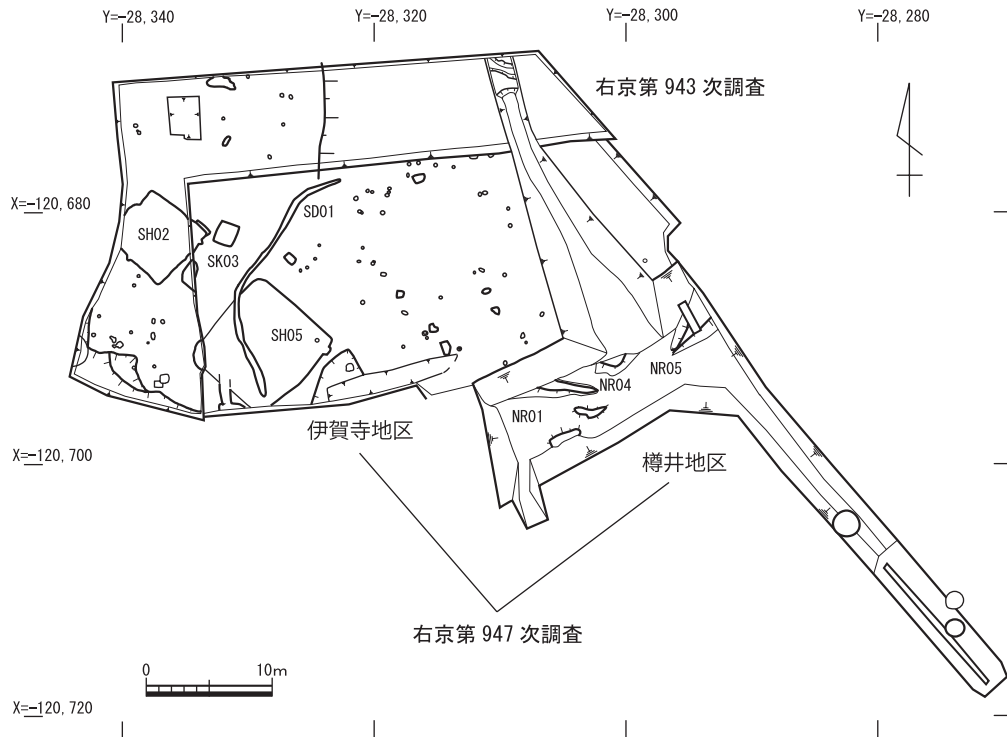
構が付き、周壁溝が廻る。中央部に被熱した炉跡が2か所あり、柱穴が6か所検出され、南西辺に整地土とその下層から周壁溝が確認できたので、SH05が6.5×7.0mの住居を拡張したものであることが判明した。

東部で南北方向の断割りを行ったところ、住居跡・柱穴が掘りこまれた黄褐色粘砂土から若干の縄文土器、その下層の礫層から縄文時代後期の土器が出土した。このことから、調査地が縄文時代中期・後期の遺構が検出されている低位段丘の土砂が再堆積した場所に、竪穴式住居跡などが作られていることが判明した。

樽井地区は、段丘の崖面から氾濫原にかけて

の地形の変換点にあたり、小泉川水系による開削と堆積の状況を確認した。堆積した礫は、拳大から人頭大までの大きさで、流路によって古墳時代の遺物を含むもの、平安時代までの遺物を含むものがある。近世以降の井戸 2 基と、平安時代以降の小泉川旧河道NR01、縄文時代以降と考えられる同河道NR04・NR05、縄文時代伊賀寺遺跡の乗る段丘裾部を検出した。

(石尾政信・戸原和人)



第 2 図 伊賀寺・樽井地区平面図



第 3 図 竪穴式住居跡 S H05(北東から)

11.長岡京跡右京第941次・友岡遺跡

所在地 長岡京市友岡西畑、下海印寺伊賀寺・下内田

調査期間 平成20年4月24日～10月31日

調査面積 1,200㎡

はじめに この調査は、石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う事前調査であり、京都府乙訓土木事務所の依頼を受け実施した。

調査対象地は、小泉川左岸の河岸段丘とその北側に広がる低位段丘上に位置する。長岡京の条坊復元によると、七条三坊十一・十三・十六町(新条坊では八条三坊九・十五・十六町)にあたり、七条大路、八条条間北小路、西三坊坊間小路が想定される位置にある。また、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。

周辺での調査状況は、調査地西側40mでは、現NTT建物建設に伴い昭和56年度(右京第70次調査)に実施された調査では、旧石器時代から近世に至る遺物が出土し、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡7基、土坑1基、七条条間小路北側溝の可能性が指摘されている溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡6棟・土坑3基・柵列が検出されている。北側で行われた調査では、古墳時代～中世の遺物が出土し、平安時代前期の掘立柱建物跡5棟、柵、土坑、中世を中心とした井戸や溝、多くの柱穴が検出されている。平成19年度に実施した本事業に伴う調査では、中世の溝や土坑、長岡京期の掘立柱建物跡3棟・土坑2基、時期不明の掘立柱建物跡3棟・鍛冶炉2基、7世紀前半の竪穴式住居跡1基、縄文時代中期後半の竪穴式住居跡1基が検出されている。今年度は、平成19年度調査トレンチ(1～4トレンチ)に続く5～8トレンチを設定し、調査を実施した。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

調査概要 検出した主な遺構は、台地上で調査した5トレンチでは、中世の改葬に伴う廃墓と考えられる土坑2基・溝1条・柱穴、平安時代前期の掘立柱建物跡1棟・溝1条、6トレンチでは、長岡京期の区画溝、時期不明の土坑・溝・柱穴、7トレンチでは、5トレンチ同様の改葬に伴う廃墓と考えられる土坑1基、長岡京期の土坑1基、柱穴が検出された。

一方、台地下方の河岸段丘上の8トレンチでは遺構の残存状況が良好であり、トレンチ南半分では表土直下が遺構面であったが、北半分では2～3層の厚く堆積した包含層が認められ

た。上層遺構として長岡京期、下層遺構として古墳時代・縄文時代の遺構を検出した。中央部分で長岡京期の東西に平行して延びる 2 条の溝、土坑 1 基・柱穴、古墳時代後期の竪穴式住居 8 基・掘立柱建物跡 1 棟、縄文時代の竪穴式住居跡 7 基・土坑・柱穴などの遺構が多数検出された。また、これらの遺構とともに、縄文時代～中世の遺物が多量に出土した。

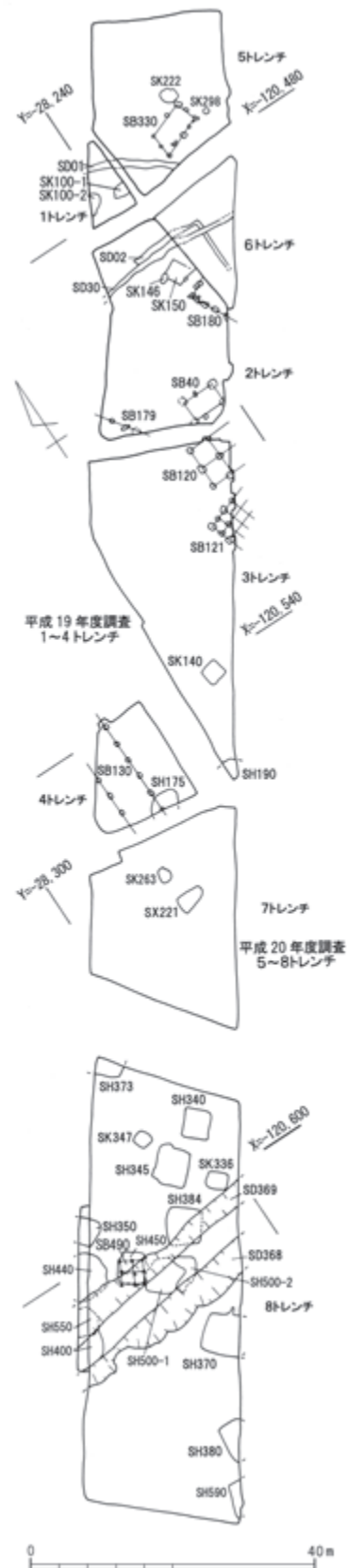
まとめ 出土した遺物から、縄文時代の遺構については、土坑は中期後半、竪穴式住居跡は後期後半の 2 時期を中心としているようである。隣接する伊賀寺遺跡で行われた調査では、中期の石囲い炉を持つ竪穴式住居跡や後期の火葬人骨を埋納した土坑が確認されており、これらとの関連が想定される。また、多量にサヌカイトの剥片や原石が出土しており、石鏃や石匙など多くの製品も認められることから、集落内で石器の製作も行われていたようである。ごく少量ではあるが、黒曜石の剥片も認められることから、これらの地域間交流も検討する必要がある。

古墳時代の竪穴式住居跡については、6 世紀前半・中頃の 2 時期があり、カマドの設置場所も前半では北東側、中頃には北西側と時期によって異なる。河岸段丘上では、後半以降の遺構・遺物は認められないことや、台地上では 6 世紀後半～7 世紀前半の遺構・遺物が認められることから、集落の中心は台地上に移っていったものと考えられる。

長岡京期の平行して延びる東西方向の 2 条の溝は、現在残る畦畔に合致したものである。両溝の内側肩部間は 3.5m を測り、東で北側に 7° ほど傾いており、また、推定復元条坊の位置にはあたらない。地形に合わせた築地など区画を目的とした施設と考えられる。平成 19 年度に 3 トレンチで検出された正方建物跡 S B 40・120 および 2・6 トレンチで検出された区画溝 S D 02 との関連が注目される。

河岸段丘上では、中世の遺構は検出されなかったが、右京第 70 次調査で検出されていた建物跡は、13 世紀にこの周辺が摂関家の荘園となったことから、荘官クラスの邸宅とも位置づけられており、平成 19・20 年度調査で検出した低位段丘上の遺構は、これらとの関連が想定される。

(増田孝彦)



第2図 遺構配置図

12.長岡京跡右京第946次

所在地 長岡京市調子2丁目

調査期間 平成20年6月17日～平成21年2月17日

調査面積 3,220㎡

はじめに この調査は、京都第二外環状道路の建設に先立って、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。調査地付近は、長岡京の新条坊復元では右京九条三坊の北東部にあたりますが、この付近では長岡京の条坊関連遺構はいまだ確認されていない。

調査概要 調査は、道路予定地内に10か所の調査区を設定して行ったが、ここでは顕著な遺構が検出されたa1・a2地区の主な遺構について報告する。

a1地区は南東部で弥生時代中期前半の方形周溝墓の一部と思われる溝と土坑を検出し、中央部から北側を中心に平安時代後期の掘立柱建物跡・木棺墓・井戸などを検出した。

土坑 S K 181は長径2.9mの土坑である。時期は、弥生時代中期前半である。土坑底に灰や炭混じりの土が堆積しており、遺物の大半はこの層から出土した。出土遺物には弥生土器・石器のほかに鐙形土製品がある。掘立柱建物跡 S B 1は南北2間、東西3間の総柱建物で、柱間は約2.1mの等間隔である。柱を抜き取った後に土師器皿と石を埋納した柱穴が数基確認されている。木棺墓 S T 201は、長辺1.2m、短辺0.6mの木棺を納めている。北側の棺蓋上に置かれていたと考えられる土師器皿がまとまって出土したことから、北頭位で埋葬されたと考えられる。長側板と3本の棧木が柄穴で結合された状況が確認できたが、底板は痕跡程度しか認められなかった。井戸 S E 244は直径約2mの掘形の中に方形縦板組横棧止めの井戸枠が据えられていた。縦板は幅に大



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

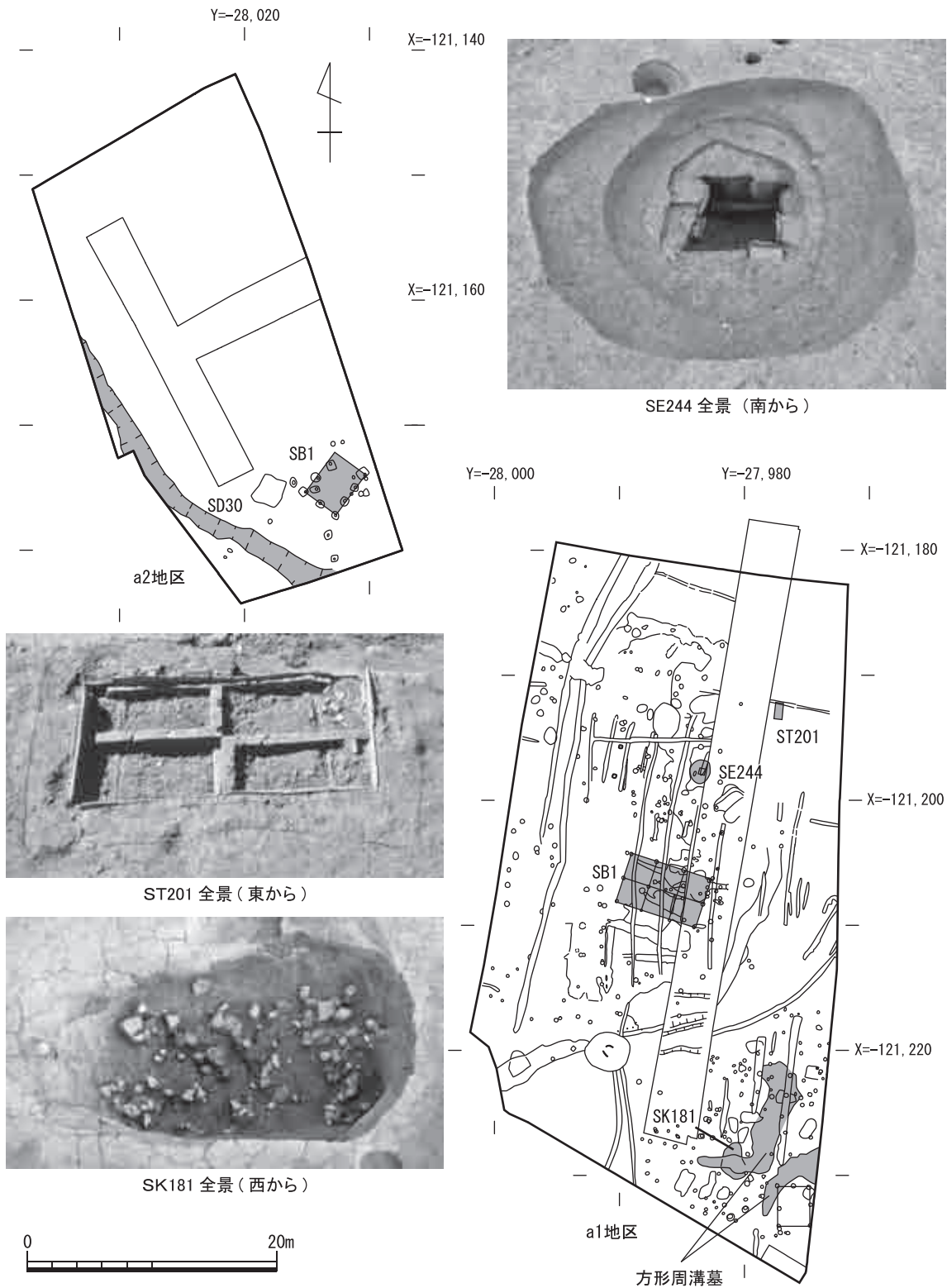
小があり、一辺を2枚で構成している面と3枚で構成している面があることから、転用材かと思われる。横棧同士は3枚組継ぎで固定されていた。11世紀後葉に埋没したと考えられる。

a2地区では平安時代中期の掘立柱建物・溝などを検出した。

溝 S D 30は調査区の南西に沿うように検出した幅約1.5mを測る溝である。10世紀中葉の遺物がまとまって出土した。溝の北東側で2間×3間の掘立柱建物跡 S B 1を検出した。柱間寸法は、桁行1.3m、梁間1.5mの等間隔である。この北西にも同様のピットがいくつか検出されており、溝の北東側には何棟かの建物が建っていた

ものと推定できる。調査区の南西側が1段高くなっており、その裾に雨仕舞いの溝をめぐらせたものと考えられる。

まとめ 今回の調査では長岡京関連の遺構は検出されなかったが、弥生時代や平安時代の新たな遺跡が発見されたことは大きな成果である。
(森島康雄)



第2図 a1・a2地区遺構配置図

13.木津川河床遺跡

所在地 八幡市科手地先

調査期間 平成20年11月13日～平成21年3月2日

調査面積 3,000㎡

はじめに 木津川河床遺跡は、宇治川、桂川、木津川の3河川合流部に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代から古墳時代の集落跡と、奈良時代から鎌倉時代の集落跡が確認されている。一方、近年、研究が進んだ地震による液状化を示す噴砂が、数多く確認されるなど、南山城を代表する複合遺跡である。

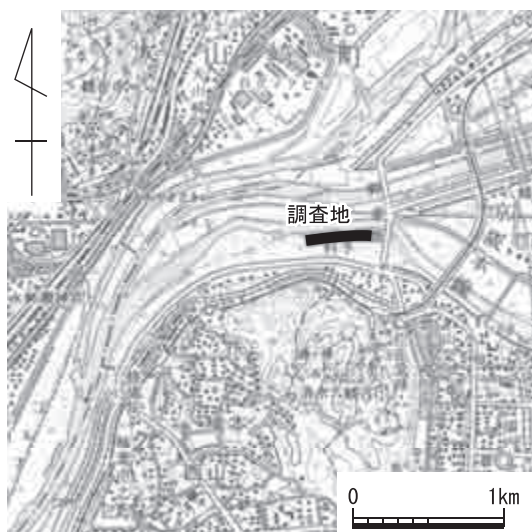
今回の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて、河川改修に先立って実施した。当該工事に伴う発掘調査は、平成19年度から実施している。昨年度の調査では、近世の耕作溝を多数検出するとともに、文禄5(1596)年の伏見大地震による液状化現象の痕跡と考えられる噴砂を検出した。その下層において、平安時代中後期の小規模な掘立柱建物跡を検出した。また、洪水により形成された青色粘土層を主体とする湿地から、平安時代前中期の土器とともに、牛馬の骨がまとまって出土した。今年度調査地は、昨年度調査地の東隣接地にあたる。

調査概要 調査地の西側では、北から西へ75°振る近世の耕作溝を検出し、また、中央から東側にかけては、同じ近世ではあるが、北から東へ60°振る耕作溝を検出している。両者の溝群の時期差については判然としないが、同じ近世にあっても耕作溝の方向の違いは、土地利用の在り方を検討するうえで重要である。

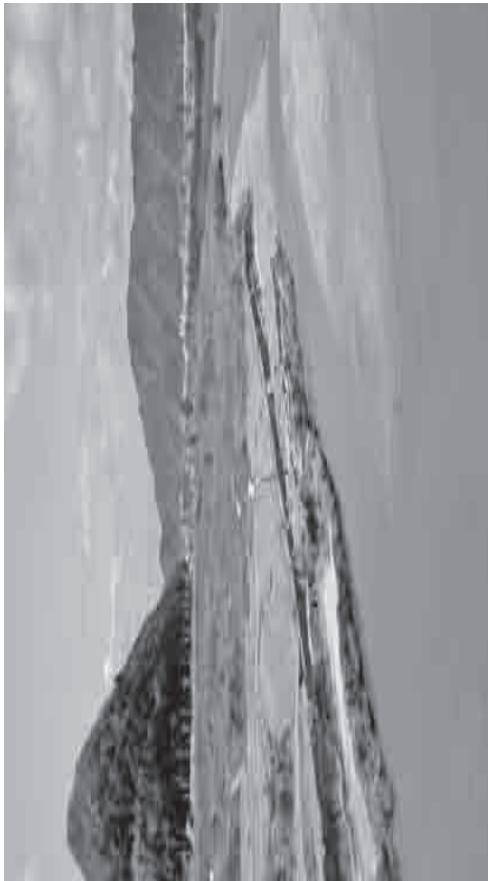
一方、鎌倉時代の整地土層からは、土師器や瓦器の破片が多量に含まれる遺物包含層を確認するとともに、牛馬の骨を埋納した土坑を検出した。また、これらの遺構面より一段下がった砂層中において、方形の井戸枠を検出した。生活面や井戸の上部は、すでに流出しているが、生活痕跡として、当該河川敷が利用されていたことを示す重要な検出遺構である。

まとめ 木津川は、明治2年までは現在より約2km東側を流れていたが、河川の付け替えにより、現河道を流れるようになった。現在の河川敷に、平安時代から鎌倉時代の生活痕跡が残存していることは、当該地が集落の縁辺部にあたることを示している。

(小池 寛・増田孝彦)



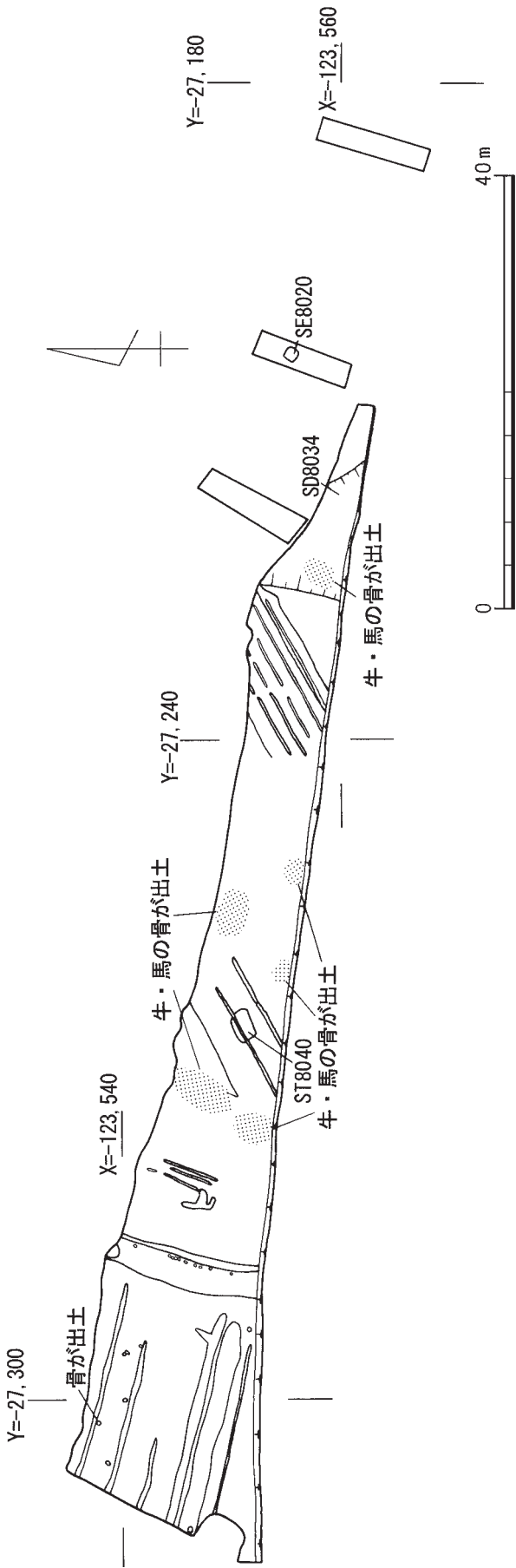
第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 京都西南部)



第2図 遺跡遠景



第3図 牛馬骨出土状況



第4図 検出遺構配置図

14.魚田遺跡第 7 次

所在地 京田辺市大住大峯
調査期間 平成20年10月 6 日～11月13日
調査面積 230m²

はじめに 平成20年度一般府道富野荘八幡線地方道路交付金事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて発掘調査を実施した。魚田遺跡は、これまで6度の調査が行われ、八幡市岩田南辺部と京田辺市の大住北辺部にまたがる弥生時代から中世までの遺構が確認されている集落遺跡である。

調査概要 調査は、遺跡範囲の北東部分での遺構の確認を目的とした試掘調査である。調査対象地内に3か所の試掘トレンチを設定し、東から順に第1～3トレンチと呼称し、調査を進めた。その結果、第1トレンチでは現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下から約1.6mの深さまでは木津川の氾濫（洪水）による数層の砂の堆積層が続き、約1.9mで粘土質の安定面を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。第2・3トレンチでは、現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下約1.5mの深さまでは木津川の氾濫（洪水）による数層の砂が堆積し、約1.8mで粘土質の安定面を確認し、溝状の遺構を確認した。溝は、南北方向に約1mの幅で等間隔に掘り込まれ、溝底には鋤などの耕具痕跡が残っていた。これらの溝群は、何らかの耕作溝と考えられるが、用途・時期については不明である。粘土層（安定面）の下層では、砂の堆積層から須恵器片が少量出土したが、洪水により流れてきたものと考えられる。

まとめ 遺構の確認が目的の試掘調査であったが、顕著な遺構は確認できなかった。第2・3



第1図 調査位置図

(国土地理院 1/25,000 淀・宇治)

トレンチで確認した溝状の遺構は、おそらくは中世以降の耕作によるものと推測される。また、各トレンチの断面観察により木津川の氾濫による洪水砂の堆積状況が観察でき、過去に複数回の氾濫があったことが確認できた。この地点の遺構は、後世の洪水によって消失した可能性も考えられる。

(村田和弘)

15. 鞍岡山古墳・下馬遺跡・片山遺跡

所在地 相楽郡精華町下粕地内

調査期間 平成20年11月11日～平成21年3月10日(予定)

調査面積 鞍岡山2号墳：1基、下馬・片山遺跡：1,000㎡

はじめに 鞍岡山古墳群は古墳時代前期末～中期前半の4基の円墳からなる古墳群で、JR下粕駅の南西約0.7kmの丘陵上に位置する。また、同古墳群の存在する丘陵南東裾部には下馬遺跡・片山遺跡等の遺跡が周知されるが、遺跡の内容・性格について明らかではなかった。今回、京都府による府道八幡木津線道路整備促進事業に伴い、計画路線帯と重複する上記の3遺跡について発掘調査を実施した。鞍岡山古墳群では、2号墳が調査対象となった。

調査概要 鞍岡山2号墳は、低位丘陵上に存在する直径約27m、墳丘高約4mの円墳である。墳丘の上半部は盛土整形し、墳丘裾には周溝が伴う。外部施設としての葺石・埴輪は存在しない。調査によって、墳頂部の中央から木棺直葬の埋葬施設1基を検出した。また、墓壙を切って2基の小規模な盗掘坑が存在した。埋葬施設の墓壙主軸は北から東に約30°振る。墓壙掘形は全長約7.4m×幅約2.8～3.5mのいわゆる2段墓壙であり、深さは1段目墓壙底まで約1.2mを測る。墓壙底には木棺を埋設する墓壙が穿たれ、調査の結果、平行する2基の木棺が存在した。2基の木棺はいずれも割竹形木棺であるが、西棺が東棺より大型である。木棺痕跡では、西棺は全長約6.8m×幅約0.7m、東棺は全長約5.0m×幅約0.55mの規模を測る。原稿執筆時点で調査継続中であり、埋葬施設の全様は不明であるが、これまでに東棺の棺内から小型の仿製鏡1面と玉類が出土した。また、西棺の棺外から鉄製武器(剣?)5点、東棺から玉類(勾玉・滑石製白玉・ガラス小玉)約160点が出土している。



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/50,000 奈良)

1. 鞍岡山古墳群、2. 下馬遺跡、3. 片山遺跡

その他、墳丘の東裾付近から2基の土壙墓、墳丘からやや離れて1基の甕棺墓を検出した。

2号墳は、墳丘部から布留式土器の破片、埋葬施設内から滑石製白玉が出土したことから、中期古墳であることが明らかとなった。

下馬遺跡は2号墳の東側丘陵裾部に存在する遺跡であり、遺跡範囲や遺構・遺物の状況把握を目的として、21か所のトレンチを設け試掘調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物の分布密度は各トレンチで異なるが、柱穴・土坑・溝・井戸・水路(河川?)など、多数の遺構を検出した。奈良時代と鎌倉時代を中心とする土器が出土し、検出し

た遺構もこれらの時期に属すると判断される。遺構・遺物は主に調査対象地の東部側に集中する傾向にあり、遺跡の中心部は地形の傾斜が緩くなる東部側にあるとみられる。一方、丘陵裾部でも柱穴や土坑を多数検出した。狭い範囲ながら遺構・遺物の集中がみられ、瓦質土器播鉢・瓦器碗・丸瓦・平瓦が出土している。瓦には布目瓦も含まれる。

片山遺跡は下馬遺跡の南東にやや離れた沖積地に存在する遺跡である。2か所の耕作地に対しそれぞれ試掘トレンチを設けて調査を実施した。下馬遺跡に近い第2トレンチでは、地表下約0.8m付近から中世と判断する溝を検出した。溝の片側には幅0.3～0.5mの範囲で平行に黄褐色の酸化土壌が存在し、酸化範囲は水田畦畔の痕跡と判断された。調査を実施した2か所のトレンチでは、瓦器や陶磁器など中世土器がわずかに出土した。

まとめ 鞍岡山2号墳は古墳時代中期の円墳であることが判明した。埋葬施設の詳細については今後の機会に報告する。

下馬遺跡と片山遺跡はともに遺物散布地で、本格的な調査は今回が初めての機会となった。片山遺跡では、良好な遺構・遺物が乏しかったが、中世頃には水田が広がっていたとみられた。下馬遺跡は、今回の調査で掘立柱建物に伴う柱穴や井戸・溝を検出し、奈良時代と鎌倉時代を中心とする集落遺跡であることが明らかになった。今後の調査に期待が寄せられるところである。

(竹原一彦)



第2図 鞍岡山2号墳埋葬施設調査状況(南西から)

長岡京期の京都

はじめに

桓武天皇は天応元年(781)年に即位すると、延暦3(784)年には70年余りの都であった平城京から長岡京に遷都し、その10年後の延暦13(794)年には長岡京を廃して平安京に遷都しました。

長岡京はわずか10年間の都でしたが、古代日本国の首都として、政治・文化・国際交流の中心地でした。しかし、文献史料が乏しいため、その実態はほとんどわかっていませんでした。そのため、“幻の都”とか、都を平安京に遷すために、仮に造った都とも考えられていました。

1. なぜ長岡京に遷都をしたのか

なぜ長岡京に遷都をしたのかを知るために、なぜ平城京が廃されたのかを見てみましょう。

まず、光仁・桓武天皇で天武系から天智系へと皇統が交替したという背景を理解する必要があります。672年の壬申の乱で勝利した大海人皇子は天武天皇として即位しました。その後約100年間にわたり、天武天皇の子孫で皇位が継承されてきました。ところが、称徳天皇(女帝)が死去すると、彼女は独身であり適当な近親者がいなかったため、神護景雲4(770)年に天智天皇の孫である白壁王が光仁天皇として即位しました。光仁天皇は桓武天皇の父にあたります。しかし、光仁天皇が即位したといっても、直ちに皇統が天智系に変わったわけではありません。光仁天皇の皇太子は、光仁天皇と井上皇后(聖武天皇の娘)の間に生まれた他戸親王^{おさべ}であり、天武系と強く関わっていました。逆に言えば、天武系の女を妻にしていたからこそ、光仁は天智系であっても、天皇になれたと言えるでしょう。

その後、皇后と皇太子が光仁天皇を呪い殺そうとしていたことが発覚し、廃后・廃太子されました。そこで、光仁天皇の子である山部親王が皇太子となり、光仁が引退した後、781年に桓武天皇として即位しました。ここに、天武系の皇統から天智系の皇統へと移ったのでした。

このように、新たに天智系の王朝を創設したとも言えるような状況の中、桓武天皇は、天武系の皇統を支持する反桓武勢力と対峙する必要がありました。そういった勢力を一掃するためにも新たな都を造りたいと願ったのでしょう。

また、僧道鏡が称徳天皇に取り入り皇位に就こうとしたように、仏教勢力が政界に介入することを取り除く必要がありました。平城京内には大寺院が多数あり



史跡 長岡宮跡碑

ますので、平城京を廃する必要がありました。

このように考えると、平城京を廃することが肝要であって、新都はどこであってもよかったとも言えます。それでは、なぜ、桓武天皇は長岡村に都を造ったのでしょうか。

第一に、この付近に渡来系氏族、特に秦氏が住まう地であったという点が挙げられます。土地が開け、産業も盛んな地であり、秦氏らの有形無形の援助が期待できます。また、長岡京への遷都と新都の建設に尽力した藤原種継の母は秦氏出身ですし、桓武天皇の外祖父乙継が渡来系氏族出身であることも影響を与えたと推測されます。

第二に、桓武天皇が「朕、水陸の便をもってこの邑に遷都す」と述べているように、長岡村付近は水陸交通の便がよいことが挙げられます。水上交通を利用すると、淀川からは瀬戸内海に、桂川・宇治川・巨椋池からは北や東の諸国に通じますし、陸路では、平城京から出た山陰道や山陽道がこの近くに通じていました。

この“水陸交通の便がよい”という理由は、長岡村が難波宮と淀川で通じていたという内容で特に重視する考えがあります。発掘調査により、長岡京の大極殿は、難波宮の大極殿を移築したと考えられています。長岡京に遷都するには、平城京内に多くの反対勢力があったと想定されますが、そういった勢力を押さえ込むには遷都をスピーディーに行い、遷都を既成事実化してしまうことが必要です。新都に移築するために平城京の建物を解体すると、平城京の人々が目にする事となり、反対勢力の警戒感を増大させます。平城京から遠く離れた難波宮の建物を新都に移築すると、平城京の人々を刺激せずに新都を造営することができます。難波宮の建築部材を水運で運搬するには、長岡村はうってつけの場所であったと言えるわけです。

最後に、桓武天皇は乙訓の地で生まれ、幼少の頃を過ごしたため、乙訓の地に都を遷したという考えもあります。桓武天皇の母高野新笠は乙訓郡大枝地方に住んでいた土師氏出身と推測されており、当時の妻問婚という形態から、母方の家で子供が育てられたと考えられるからです。

2. なぜ長岡京を廃都としたのか



長岡宮跡 宝幢遺構

さて、桓武天皇は784年5月に遷都の発表、長岡の地に下見の使者を派遣、6月には造長岡宮使の任命、11月には長岡京へと遷っていきます。このように、長岡京への遷都は、遷都の発表後、わずか6ヶ月足らずで行われました。この時点では、宮城内の主要な部分だけが完成していたのでしょう。

遷都後も新都の造営工事は盛んに行われていたでしょうが、

遷都後、まだ1年と経たない延暦4(785)年の夜、造宮長官藤原種継が、何者かの手によって暗殺されてしまいます。その下手人を捕まえてみると、有力氏族の相伴家持・相伴継人らが首謀者と判明し、桓武天皇の弟である皇太子早良親王が一枚噛んでいたこともわかりました。早良親王は捕らえられ、乙訓寺に幽閉されますが、早良親王はハンガーストライキを行い、無実の罪を訴えますが、体力が弱っていたため、配流先の淡路島に入る前に亡くなってしまいます。

早良親王の死後、皇太后、皇后、夫人が相次いで亡くなり、皇太子が病に伏すなど、蝦夷討伐軍が大敗して帰って来るなど、天皇の周りに不幸が重なって起こります。また、天然痘が流行したり、大雨で式部省の門が倒れたり、都が洪水の被害を受けるなどの天変地異が相次いで生じています。陰陽寮に占わせると、「早良親王の祟りである」と言われ、その怨霊を鎮めようとしますが、その恐れを取り除くことが出来ません。そのため、長岡京を捨てて、新京を造営するに至ったというのが、早良親王の怨霊に悩まされて、長岡京を棄てたという考えです。

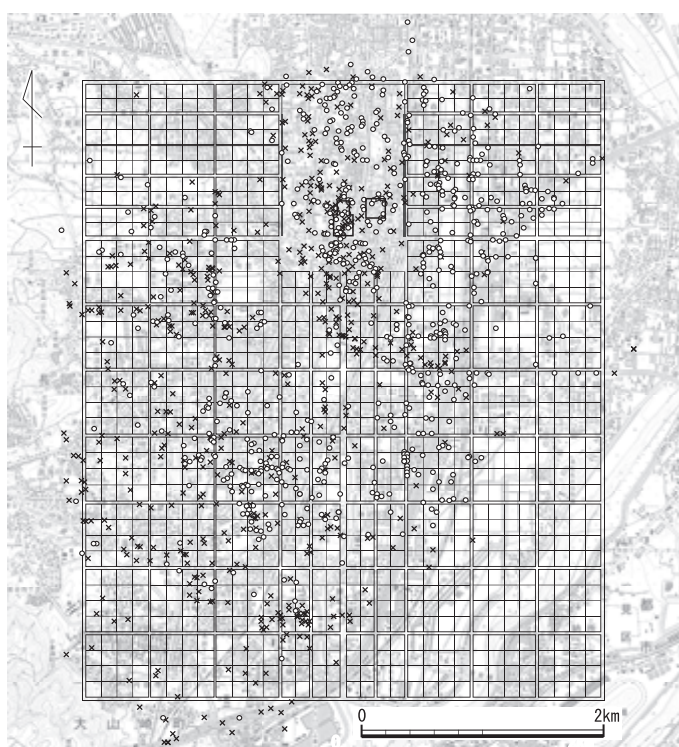
この他にも、史料に何度かの洪水の記事が見えることから、長岡京が水害に対して極めて弱い地形であることが判明したために廃都したという考えや、水害に備えて都を改造するためには新たな都を建設するのに匹敵するほどの巨額な費用が必要であったため、改造をあきらめて新都の建設を決意したという考えがあります。

また、実際に遷都を行ったところ、長岡京が地理的に手狭であったために、新たな都、平安京へと遷都したという考えがあります。実際、都の南西は桂川があり、西南部は丘陵となっており、都城を造ることができない地形となっています。

以上の考えを組み合わせ、長岡京遷都から廃都までを説明する考えもあります。新王朝の創設の気概を持って天皇に即位した桓武天皇は、中国の天命思想に則り、新王朝には新都を造営すべきと考え、長岡京に遷都しましたが、その地が早良親王の祟りや大雨などの災厄のために穢れたものとなり、その地を廃してやり直すために平安京への遷都を決意した、というものです。

以上、なぜ長岡京に遷都し、すぐに廃都したのか、という考えをかいつまんで紹介しましたが、当時の史料が破棄されており、詳しい事情はよく分からないというのが実情です。

(岩松 保)



長岡京の条坊復原と長岡京期遺構検出地点

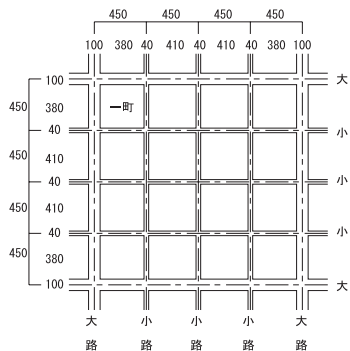
○ 長岡京期の遺構を検出した調査地点

× 長岡京期の遺構を検出なかった調査地点

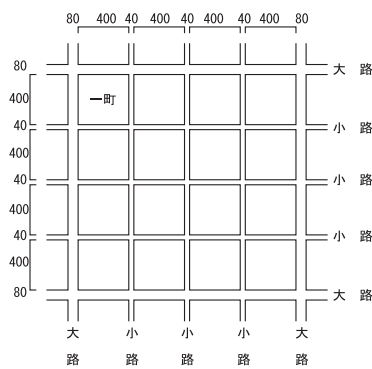
条坊制の変遷

古代日本の都城は、中国の隋・唐の都を模して造られました。天皇の住まう内裏、政治を行う朝堂院を中心にして国の役所が建ち並び、その周囲には役人や町民が住まう街区が設けられていました。平安京では南北5.2km、東西4.5kmの長方形で、東西方向に13本の大路、南北方向には11本の大路が造られていました。大路と大路の間には、基本的には南北・東西に3本の小路が配置されて、大路・小路で囲われた方形区画が1町(約120m四方)という宅地の単位になります。

平城京は廃都後、急激に農地化されたため、田畑の形に都城の痕跡が残りました。そのため、田畑の形を読みとることで、条坊計画が復原されました。平城京では、450尺方眼に割り付けた基準線から大路・小路の幅分を割り取って、1町が設けられたと考えられています。この方法で



平城京の条坊計画（単位は尺）



平安京の条坊計画（単位は尺）



長岡京の条坊計画（単位は尺）

は、宅地の大きさは大路に面しているのか、小路に面しているのかで、路面として割き取られる大きさが異なるため、1町の面積に広狭がありました。

平安京では、平安時代前期に編纂された『延喜式』『京程』の中に平安京の設計プランが記されています。平安京では、まず400尺四方を1町と決め、そこに大路や小路の幅分をつけ加えています。大路に面していようが、小路に面していようが、1町の面積が同じになるように計画されたのです。

長岡京の条坊計画については、全く分かっていませんでしたが、発掘調査の回数を重ねるにつれて、平城京や平安京とは異なった計画で造られていることが分かってきました。

現在、長岡京の条坊計画は、宮城に面する街区(南・東・西街区)の1町の大きさを400×350尺、宮城に面しない街区(左・右京街区)の1町を400×400尺とし、大路と小路の幅分がその外側につけ加えられたと考えられています。いわば、400×350尺と400×

400尺の二様の大きさの宅地で構成されているのです。平城京のように大路に面するか、小路に面するかで宅地の大きさが異なる条坊計画と、平安京のように単一の宅地で構成されている条坊計画との、ちょうど中間の形態と考えられています。

しかし、細かな点で、研究者の見解の一致を見ていません。長岡京の条坊計画は、数多くの発掘調査の成果を検討した結果、その姿が徐々に明らかになりつつあります。(岩松 保)

1 町四方を班給された貴族の館

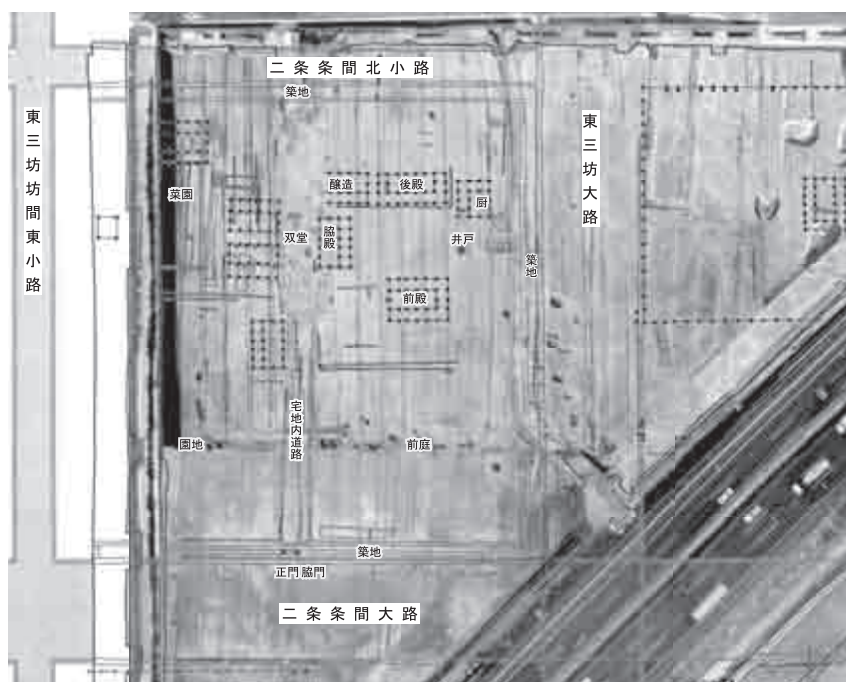
名神高速道路を大山崎インターチェンジから京都方面に向かうと桂川パーキングエリアがあります。この建設に先立ち、平成5～10年にかけて、高速道路をはさんで、東西320m×南北210mの範囲を調査しました。この調査で、左京二条三坊十五町は1町全体がひとつの宅地として班給されていることがわかり、宅地内の建物配置と利用形態についてもよくわかりました。

この宅地は、周囲を築地で囲まれ、南面する二条条間大路には宅地の中央に正門があり、その東に脇門が並んでいます。宅地内には、隣接した2門に対応した2条の南北道路が設けられています。これを北に直進すると、宅地の北半には殿舎があります。

1町の宅地内は田字形に四分割されており、中心的な建物群は北東部に配置されています。前殿と後殿が「ニ」字型にあり、後殿の西に醸造用の建物があり、それらの前面には脇殿・井戸などが造られ、「コ」字型配置となっています。公的な空間として利用されたのでしょうか。宅地の南東部には建築物は全くなく、北東部の建物群の前庭としての空間となっています。西北の地域では5mの間隔で畝溝が何本も掘られ、菜園が作られていたと思われます。その東側には2棟の建物が南北に軒を接した^{ならびどう}双堂が建てられており、柱穴の中から漆喰・檜皮が出土していることから、檜皮を葺き、漆喰で壁を化粧した建物と考えられます。私的な空間として利用されたのでしょうか。西南の区画では北東隅に柵で囲まれた建物が1棟のみで、広い空間が広がります。庭園などの園地の空間でしょうか。

長岡京跡では数多くの調査が行われていますが、一度にはほぼ1町全体を調査した事例は数えるほどしかありません。1町を班給され、大路に門を開くことができるのは高位・高官に限られます。長岡京遷都時に公卿の地位にいた13人の中から、この館の主を1人に絞り込むのは難しいのですが、双堂が東大寺法華堂・佐伯院金堂と類似することなどから、当時「造長岡宮使」であった^{さえきのいま}佐伯今^{えみし}毛人がその候補に挙げられています。

(戸原和人)

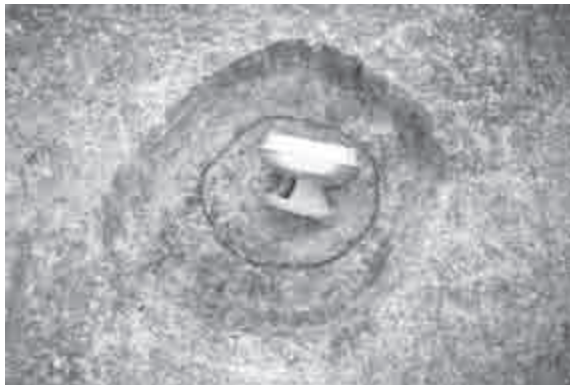


左京二条三坊十五町の宅地

地鎮の起源と都の地鎮

現在、建物を新築する際、地神に工事の安全を祈願する地鎮祭(じちんさい)が広く行われます。文献上、最も古い地鎮祭は、『日本書紀』持統天皇 5 (691) 年に藤原京を鎮め祭らせたとの記事があります。まず、地鎮の起源を整理しておきます。

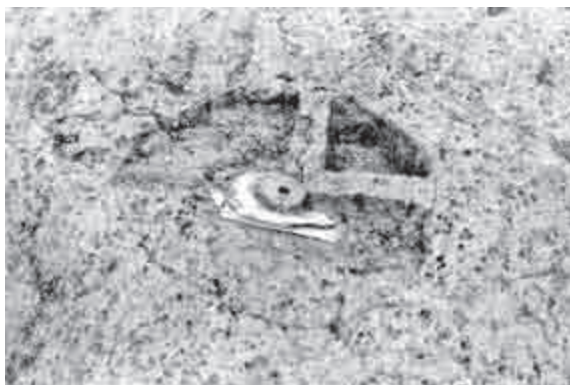
古墳時代中期の精華町森垣外遺跡では、2 個体の土師器高杯を埋納する柱穴などが複数確認さ



森垣外遺跡の地鎮



森垣外遺跡の地鎮



長岡京跡の地鎮遺構

(東三坊大路と二条条間北小路の交差点)

れています。一般的に古墳時代中期の居住施設は、竪穴式住居が主流ですが、森垣外遺跡のように掘立柱建物が居住施設として多用された集落においては、柱穴内の地鎮が先んじて行われました。地鎮祭は、古墳時代にはすでに行われていたことがわかっています。

次に、長岡京期の事例として、東三坊大路と二条条間北小路の交差点から木の箱に銭貨を埋納した地鎮遺構が検出されています。道路敷設に関する地鎮跡と考えられます。また、右京五条二坊一町の建物に付随する土坑からは、据えられた状態の須恵器の壺と神功開寶 1 枚を埋納しており、さらに、左京七条二坊七町の建物跡の柱穴から四仙騎獣八稜鏡が 1 点出土しています。これらは、建物を対象にした地鎮跡と考えられます。長岡京期以後の平安時代や中近世においても、埋納遺物の種類と員数、埋納遺構の形状、建物に対する地鎮遺構の位置関係など、統一的ではない地鎮祭が、各地で執り行われたことがわかっています。

地鎮祭は、密教や神道、民間信仰ごとに異なった作法で行われるようになります。その背景には、地鎮祭が古墳時代中期には成立し、それ以後、日常生活に溶け込んだため、なかなか、統一した地鎮祭を執り行うことがなかったのではないのでしょうか。都での地鎮祭も多様に執り行われたことがわかっています。

(小池 寛)

轍から見た長岡京の造営

「轍」^{わだち}は、「輪つ道」、「輪立ち」とも書きますが、車輪が通った痕跡が筋状に残ったものです。現在の固いアスファルト道路でも、自動車が頻繁に同じところを走ると轍ができます。古代の轍は、牛車^{うしぐるま}と呼ばれる二輪車が残した痕跡です。

発掘調査では、幅数cmから10cm程度で並行して走る2本の溝を「轍」として認定します。長岡宮・京では、轍は10数か所で発見されています。多くは条坊の道路面からですが、宅地内や宮内でも見つかっています。2条の轍の間隔から、車幅(車輪間隔)がわかります。1.45m幅が最も多く、1.35・1.55mも見られます。きれいに残っている轍の断面形は方形ですが、何度も通行しているところでは「U」字形になっています。深さは8～20cmとバラツキがあり、地盤の硬軟や牛車の荷重の違い、通行量の違いによるものでしょう。

牛車には、乗用車としてのものと荷車としてのものがあります。前者を「ぎっしゃ」、後者を「うしぐるま」と呼んでいます。絵図や文献を見ると、乗用車は荷車(台車)の上に「箱」と呼ばれる家形が取り付けられています。しかし、轍の間隔からは、乗用車として使われたのか、荷車として使われたものなのかは分かりません。長岡京で乗用車としての牛車が用いられていたのかどうか、本当のところは分かりません。

牛車は、人力で運ぶ量の5～10倍の様々な荷物を運搬できる車です。長岡京跡は10年の短い期間でしたが、造営に必要な資材は平城京や難波京の建物が解体されて運ばれました。二条条間北小路と東三坊大路交差点西寄りの路面で轍が見つかっています。左京二条四坊七町に運河と船着き場が見つかりましたので、ここまで柱・瓦・礎石・化粧石(切石)等が運ばれて、牛車に積み替えられた上で、宮内へと運んだ時の轍跡でしょう。また、右京26次調査では、西二坊大路の路面と宅地内で轍が見つかりました。この宅地の南側に隣接する今里車塚古墳の墳丘は削り取られていますので、墳丘の土を荷車で運搬した時のものでしょう。平安京では「西市」周辺では市場で売買された品物を運搬していました。

長岡京造営は急ピッチに進められたと考えられていますが、轍痕跡が多く残ることからも、荷車としての牛車が頻繁に利用され、活躍したことが窺われます。

最後に蛇足ですが、古代ローマンロード(「すべての道はローマに通じる」で有名な道路)では、石畳で舗装されている路面に予め轍が作られていました。それは、戦車、荷車を速やかに走らせるためのものです。偶然の一致ですが、長岡京跡の車輪間隔1.45mは、日本の新幹線のレール幅、古代ローマの轍幅とはほぼ同寸法です。

(竹井治雄)



二条条間北小路路面に残された轍

部屋を飾った唾壺^{だこ}

向日町競輪場の改修に伴う長岡宮跡第164次調査では、掘立柱建物跡・柵列・溝等を検出しました。この調査地は、長岡宮西方官衙地区にあたります。この調査地の土坑の中から横転した唾壺が出土しました。唾壺に隣接して鉄釘が見つかりましたので、木箱に入れられていた可能性があります。長岡京跡では、唾壺の出土例は、これ以外にわずか3例しかありません。

唾壺とは、やや膨らんだ球形の体部に漏斗状に広がる口縁部が付く形態の壺の呼び方です。この特徴をもつ壺は、出土資料が増加していますが、都城・地方官衙・寺院関連の遺跡および窯跡から出土するものがほとんどで、集落跡から少数例、古墓からの出土が1例ある程度です。

隣国中国では、『中国陶磁史』によると頸が細く締め口縁端部が盤状に立ち上がる細頸壺の小型のものが唾壺と呼称されています。時代とともに若干の変化がみられ、隋・唐代には胴部が横方向に大きく膨らむ形となります。漏斗状口縁をもつ唾壺が、貞観13(639)年の墓碑と共に出土しており、唾壺の器形は唐代初期には出現していたことがわかります。

出土資料を基に、唾壺の時期的な変遷を考えたことがあります。それは球形体部最大径がどの位置にあるかを基準にしたものです。最大径が体部の中央より上にあるものが古く、最大径が体部の中心にあるもの、最大径が体部の中心より下にあるものへと変化してゆきます。いわば、怒り肩からメタボ腹、下膨れへと変遷したのです。日本最古の出土例は、長岡宮跡から出土した怒り肩タイプのもので、奈良時代の彩釉陶器の小型壺に漏斗状の口縁部を取り付けた形態をしています。日本国内で平安時代に出土資料が集中し、それ以降の唾壺の出土資料は知られていません。

文献にみえる唾壺の資料である類聚雑要抄には調度品として「母屋簾卷上。中略 屏風前立二階一脚 上屑置唾壺、汨杯等 中略」とあります。京都御所・清涼殿朝餉の間の二階厨子棚には、類聚雑要抄記載の「銀唾壺」を基にしたと思われる銀製品の唾壺がみられます。正倉院には有名なガラス製唾壺があります。

唾壺が当時の日本でどのように使用されていたかはよくわかっていません。出土資料が少ないことから貴重品であったと考えられます。唾壺の名のように「つばはき」として使用されたのではなく、文献資料にみえるように調度品として定着したのでしょう。乾燥した大陸性気候の中国と異なり、海にかこまれた湿潤な日本では咽喉が乾くことが少ないため、屋内で唾・痰を「はき・ためる」という習俗はなかったようです。公家・武家社会においては、礼節として懐紙などに包み込むなどとしたのでしょう。

(石尾政信)

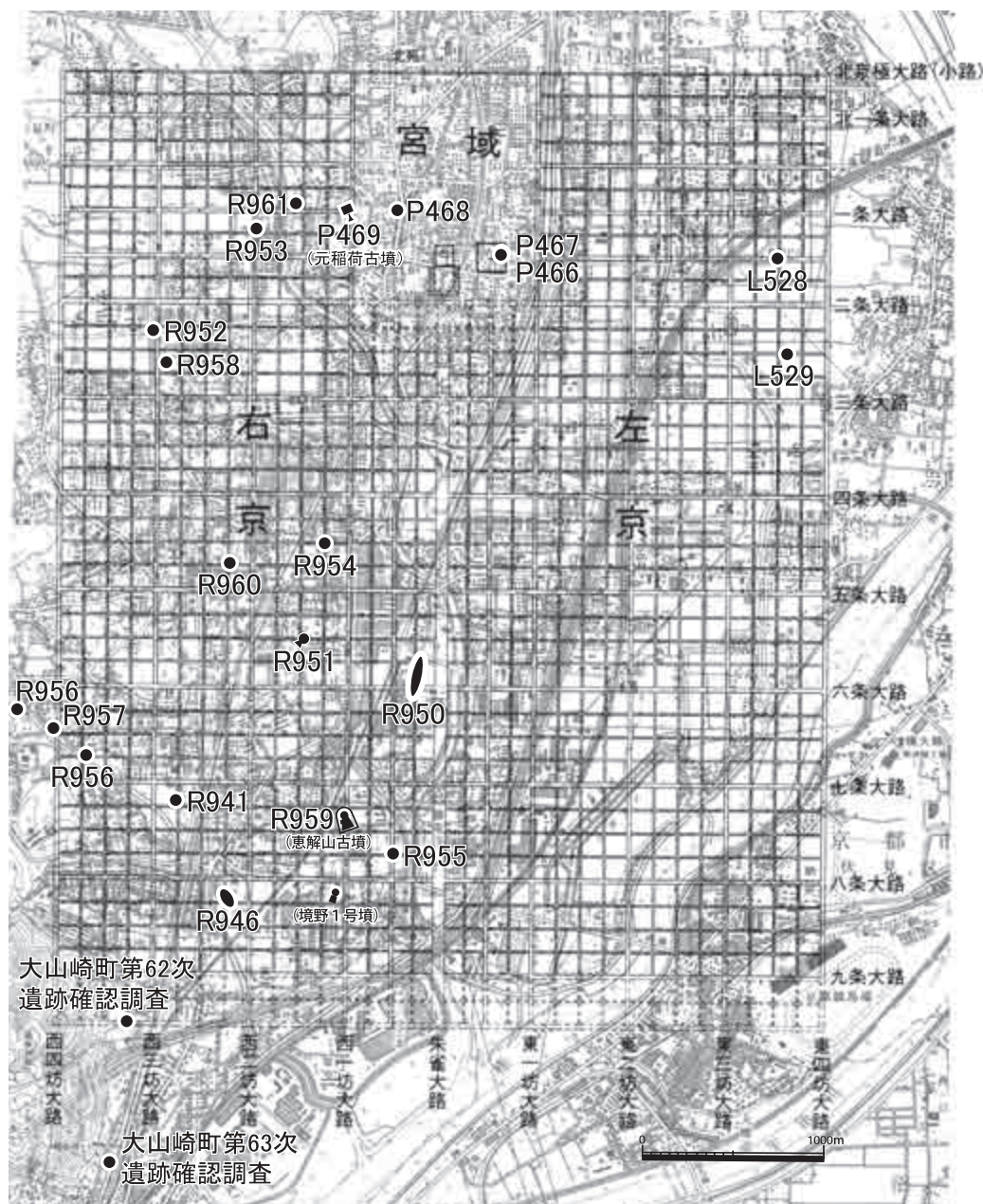


長岡宮跡第 164 次調査出土の唾壺

長岡京跡調査だより・104

毎月1回、長岡京域で調査に携わっている機関が集まって長岡京連絡協議会を実施している。平成20年10月から平成21年1月までの例会では、23件について報告があった。以下では、報告地点を地図上に示し、顕著な成果が得られたものについてその概要を紹介する。

宮域 宮第466・467次では、築地回廊で囲画された第二次内裏、内裏正殿の北東側至近において、掘立柱形式の規模の大きな建物跡が検出された。廂の出が長い東西棟に復原可能で、その建



調査地位置図

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

物形式や殿舎配置は、先行する平城宮や、後の大内裏絵図の描写とよく一致している。宮第468次では、脇殿を従えた礎石建正殿を擁する正方形築地区画の東辺の確認調査が実施された。結果、後世の地形改変のため条路(西一坊坊間大路)を含めた長岡京期の遺構は残されていないことが判明した。宮第469次(元稻荷古墳第5次)では後方部墳丘裾において葺石に不整合で覆われた礫敷遺構が周囲を取り巻いている状況が追認された。また吉備系および讃岐系の特殊器台・壺が出土した。

右京域 右京第950次では、弥生時代中期の環濠・竪穴式住居跡とともに、「永井直清公御在所城州神足図」に描かれた神足館本丸南辺の内枳形虎口を実証する堀跡が検出された。右京第951次では、古墳時代中期の前方後円墳である塚本古墳の周濠と、長岡京造営に係る条路(六条条間小路側溝)の切り合い関係が判明し、京造営の際に削平を受けていない状況が確認された。周濠内からは多量の埴輪類が出土している。右京第952次では、弥生時代の集落を取り囲む環濠の一部、古墳時代後期の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸、長岡京期の西三坊大路両側溝とそれに面する宅地内溝などが検出された。右京第954次では、都造営時に削平された方墳が3基確認され、周囲に方墳が累々と築造されている様子が明らかとなった(開田古墳群)。このうち周溝の規模が大きい13号墳から埴輪片(円筒・家・蓋・盾・靱・甲冑・鶏・馬)が多量に出土した。右京第955次では、縄文時代前期(北白川下層Ⅱb～Ⅲ期)の集落関連遺構(竪穴式住居跡・貝塚様窪地)が発見され、多くの土器・石器資料が得られた。右京第956・957次では、小泉川沿岸に沿って縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の分布を確認した。右京第958次では、古墳時代の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、長岡京期の掘立柱建物跡、鎌倉時代の溝などが確認された。とくに長岡京期の建物は一辺1m前後の大型の柱掘形をもち、9尺等間の柱配列など、格式の高い建物に復原できる。右京第959次として恵解山古墳の調査が開始された。詳細は次号に譲るが、これまでに後円部墳丘の埴輪列・葺石が確認されるとともに、造出部が東側にも存在することが明らかとなった。右京第960次では、西三坊坊間東小路とこれに直交する五条条間南小路の側溝を確認するとともに、これに先行する飛鳥時代の掘立柱建物跡や溝を検出した。

左京域 広域な調査成果がある名神桂川パークイングの東隣接地で行われた左京第528次調査では、二条条間大路の両側溝(路面幅約24m)と、これに面する宅地内で棟筋を揃えて整然と配された掘立柱建物跡2棟が検出された。下層には縄文晩期の住居痕跡とみられる焼土のひろがりや、弥生時代の遺物を含む流路2条などが検出された。左京第529次では、三条条間小路の両側溝と同時期の掘立柱建物跡1棟が検出され、京域の東端における土地利用の様子を知ることができる成果を初めて得た。

京域外 大山崎町第63次遺跡確認調査として、史跡大山崎瓦窯跡の調査が実施された。結果、史跡地の北側でさらに1基の平窯跡が発見された。焚き口が、南の一群と一直線上に位置し、窯間距離(約8m)の整数倍である48m位置に立地することも含めて、一連の規格に則った瓦窯配置を窺わせる成果を得た。

(伊賀高弘)

普及啓発事業

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

現地説明会

関西文化学術研究都市に伴う調査で、新聞紙上でも大きな話題となる調査が相次ぎました。木津川市鹿背山瓦窯跡は、瓦窯2基を発見するとともに、粘土採掘坑や通路など、瓦生産の工程が想定できる遺構が検出されました。説明会には314名の方が各地からお越しになり、古代の瓦生産に思いを馳せておられました。

万葉歌木簡が出土した馬場南遺跡の現地説明会は、木津川市教育委員会と合同で開催しました。全国で3例目と大きく報道され、当調査研究センター設立以来最多となる1,300人を越える方々が見学にお越しになり、5回にわたって説明をさせていただきました。また、万葉歌木簡や塑像片などの出土遺物を木津川市役所ホールで展示しました。見学者の皆さんは、史書に登場しない古代寺院「神雄寺」の絢爛な遺物に目を輝かせておられました。

また、弥生時代後期の集落を限る環濠や木津城に伴う堀跡が見つかった木津川市木津城山遺跡や、古墳時代から平安時代にかけての灌漑用水路とみられる多数の溝などが見つかった南丹市室橋遺跡でも、多くの見学者の皆さんが、遺跡の説明に熱心にメモを取っている姿が見られました。

今後も現地説明会や埋蔵文化財セミナー等で調査成果を発表していきますので、会場に立ち寄って、歴史に思いを馳せていただければ幸いです。

出前授業等

当調査研究センターでは、地域の歴史を子供たちに知ってもらおうと出前授業や発掘調査体験を実施しています。11月には、亀岡市教育研究所から小学6年生2名が、亀岡市蔵垣内遺跡の発掘体験に参加してくれました。送られてきた礼状には、再度参加したい旨が書かれてあり、未来の考古学者誕生が期待されます。亀岡高等学校3年生16名も、蔵垣内遺跡の発掘体験に参加。丹波国分寺周辺の歴史について学んでもらいました。また、2月には、長岡第五小学校の歴史探検クラブの4年生から6年生の児童7名と先生2名が長岡京跡の調査地に授業の一環として見学に訪れました。



長岡京跡の調査を見学する長岡第五小学校の皆さん

センターの動向

(平成20年11月～平成21年2月)

月	日	事	項
11	4	蔵垣内遺跡(亀岡市)発掘調査開始	
	5	人権大学講座(世界人権問題研究センター) 肥後弘幸調査第1・2課長、杉江昌乃総務係長受講	
	6	亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市) 安田正人事務局次長受講	
	7	教育庁職員行政・人権問題研修及び教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ 小山雅人総括調査員、辻本和美次席総括調査員、松井忠治・引原茂治・竹原一彦・戸原和人・田中彰主任調査員、岡崎研一専門調査員、鍋田幸世総務課主事受講	
11		鞍岡山古墳群・片山遺跡・下馬遺跡(精華町)発掘調査開始	
12		仲ノ段遺跡(福知山市)発掘調査開始	
		魚田遺跡発掘調査終了(10/6～)	
13		木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始	
14		全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪市) 小山雅人総括調査員出席	
19		人権大学講座(世界人権問題研究センター) 安田正人事務局次長、小池寛調査第1係長受講	
20		「京丹後史博士」育成講座(於：京丹後市) 岩松保主任調査員講師派遣	
		蔵垣内遺跡発掘体験 午前：亀岡市教育研究所小学6年生、午後：亀岡高校3年生	
21		恭仁宮跡調査専門委員会(於：木津川市) 肥後弘幸調査第1・2課長出席	
25		教育庁職員行政・人権問題研修及び教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ 増田孝彦・森島康雄・中川和哉主任調査員、石尾政信・黒坪一樹専門調査員、伊賀高弘・柴暁彦主査調査員、石崎善久・高野陽子・村田和弘・松尾史子調査員、今村正寿総務課主任受講	
		温江遺跡(与謝野町)発掘調査開始	
26		長岡京連絡協議会	
12	3	個人情報保護法説明会(於：京都市) 肥後弘幸調査第1・2課長、今村正寿総務課主任出席	
		長岡京跡右京第953次(長岡京市西の京)発掘調査終了(9/24～)	
		室橋遺跡(南丹市)発掘調査開始	
	6	第30回木簡学会(於：奈良市) 伊野近富次席総括調査員派遣	
12		京丹後市網野銚子山古墳調査委員会(於：京丹後市) 肥後弘幸調査第1・2課長出席	
17		長岡京連絡協議会	
		人権問題特別研修(於：京都市) 辻本和美次席総括調査員受講	
18		第84回役員会・理事会(於：京都市) 上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、増田富士雄、山内一(代理)、小池久各理事出席	
20		南丹市立文化博物館「子ども体験教室」 中川和哉主任調査員派遣	
21		鹿背山瓦窯跡(木津川市)現地説明会(314名参加)	

- 24 職員研修「遺跡調査における分析について」講師：中川和哉主任調査員
- 26 仕事納め式
- 1 5 仕事始め式
乙訓公的年賀交歓会
- 17 馬場南遺跡(木津川市)現地説明会(1,325名参加)
- 20 「馬路町史」編さん委員会(於：亀岡市) 高野陽子調査員派遣
- 22 人権問題特別研修(於：京都市) 鍋田幸世総務課主事受講
- 23 人権教育行政担当者等研究協議会(於：向日市) 水谷壽克調査第1課主幹、田代弘資料係長、森正調査第2係長、引原茂治・森島康雄主任調査員、今村正寿総務課主任受講
- 26 長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡(長岡京市)関係者説明会(8名参加)
- 28 長岡京連絡協議会
人権問題特別研修(於：京都市) 筒井崇史調査員受講
- 29 南丹市八木町史編さん専門部会(於：南丹市) 中川和哉主任調査員派遣
- 2 2 奈文研研修「寺院遺跡調査過程」 松尾史子調査員受講(～2/6)
- 4 平成20年度埋蔵文化財担当者等講習会(於：福岡県) 森正調査第2係長、黒坪一樹専門調査員出席(～2/5)
- 6 温江遺跡(与謝野町)関係者説明会(61名参加)
- 9 長岡第五小学校歴史探検クラブ9名長岡京跡右京第957次現地見学
- 13 木津城山遺跡(木津川市)現地説明会(88名参加)
長岡京跡右京第957次関係者説明会(8名参加)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：枚方市) 小山雅人総括調査員出席
人権問題特別研修(於：京都市) 竹井治雄専門調査員受講
- 15 室橋遺跡(南丹市)現地説明会(27名参加)
- 20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック役員会(於：和歌山市) 中西和之常務理事・事務局長、安田正人事務局次長出席
人権問題特別研修(於：京都市) 伊野近富次席総括調査員受講
- 23 増田富士雄理事木津川河床遺跡現地指導
- 25 長岡京連絡協議会
速報企画展「馬場南遺跡 謎の寺 神雄寺」開催(於：京都府立山城郷土資料館 ～3/4)
- 26 温江遺跡(与謝野町)出土人面土器記者発表
- 27 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：八尾市) 肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第1係長出席
- 28 第112回埋蔵文化財セミナー 木津川市いずみホール(312名参加)
京都市立高等学校社会科研究会臨地研修会(於：京都府立山城郷土資料館) 講師：肥後弘幸調査第1・2課長



紫のゆかり、ふたたび



源氏物語千年紀

編集後記

情報 108 号が完成しましたのでお届けします。

本号では、職員の共同研究報告を掲載しました。遺物を詳細に観察して分類することは、考古学の基本的な研究方法ですが、地道な資料の蓄積が欠かせません。各地に足を運び、資料を観察した成果をご味読ください。

シリーズ「遺跡でたどる京都の歴史」の 5 回目は、長岡京期の京都です。幻の都とも言われた長岡京の姿を浮かび上がらせたのは、2000 件に近い発掘調査の成果にほかなりません。その成果の一端を感じていただければと思います。

(編集担当 森島康雄)

京都府埋蔵文化財情報 第108号

平成 21 年 3 月 31 日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星印刷商事株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141